

# 一つの家族としての人類意識

## ——マハトマ・ガンディーとアブドゥル・ガッファー・カーン：二人の奉仕者

宇野(徳田) 彩子

初めに

宗教的相違を越えた融和(ユニティー)はインド独立の父と呼ばれたモハンダス・カラムチャンド・ガンディー (Mohandas Karamchand Gandhi 1869–1948) の悲願であった。ガンディーはインドの自由(swaraj スワラージ)の実現に不可欠な三つの条件として、ヒンドゥー教徒とムスリムなど宗教の異なる人々の和解・融和、インドの貧困からの脱却、そしてカーストの最下層におかれ差別され抑圧されてきた不可触賤民の制度の徹廃を最重要課題としていたが、中でも最も困難な問題としてガンディーをその死まで苦しめた問題はヒンドゥー教徒とムスリムの政治的対立の問題であった。南アジアでは宗教的相違を敵対的に理解する政治的イデオロギー、及びそこから生み出される行動をコミュニアリズム (communalism) という言葉で表すが、このコミュニアリズムこそはインドとパキスタンの分離独立をもたらし、その後も両国間の戦争や国境紛争、そして今日両国が核兵器を保持するにいたるまでの軍拡競争をもたらした元凶である。コミュニアリズムに対してガンディーの立場はコミュニアル・ユニティー (communal unity) と言い表すことができるが、その基盤には、すべての人間は神の子として平等であり、自由・スワラージという同じ目的に向かって進む兄弟姉妹であり、異なる諸宗教は唯一なるもの、ユニティーの多様な現れとして互いに助け合い学びあうべきである、というガンディーの現実理解があった。そこでは相互の関係はあくまでも非暴力(ahimsa、アヒンサー)あるいは愛によって規定され、宗教の相違が敵対関係として捉えられることは不可能であった。インドではガンディーの指導の下非暴力を原則とした世界史上稀有な独立運動が展開し、多くの人々がガンディーと行動を共にしたが、コミュニアル・ユニティーというヴィジョンを理解し、非暴力を信念として実践した人は非常に例外的であったことが特に分離独立にいたる歴史的展開の中で明確にされている。<sup>1)</sup> 本論ではその例外者の一人であり、ガンディーと全く異なる背景を持ちながらコミュニアル・ユニティーのビジョンを共有し、その実現に生涯をかけて共に闘ったムスリム指導者の一人、アブドゥル・ガッファー・カーン (Abdul Ghaffar Khan 1890–1988)

の知的遍歴とガンディーとの関わりを検討することを通して、例外的ではあるが、コミュニカル・ユニティーは宗教の相違を越えた普遍性をもっていることを示し、最終的には分離独立にいたる歴史的展開の中でのガンディーとガッファール・カーンの非暴力の実践について述べたい。

ガンディーは、生まれ育ったグジャラート州の背景や敬虔なヒンドゥー教徒であった両親を始めとした周囲の環境から、異なる宗教に対する敬意や寛容の精神を子供の頃から教えられていた。その後、英国留学を経て、南アフリカで真理(satya, サッティヤ)の追究こそが自らの生きる目的であるとガンディーは明確に自覚し、さらに真理追究の唯一の道すじは非暴力であるという確信を持つに至った。<sup>2)</sup> 具体的には、南アフリカでの厳しい人種差別の経験が決定的な契機となり、ガンディーはインド人の人権を守るための闘争を展開し、その過程で徹底的な自己浄化の誓いと奉仕者としての召命(vocation)に基づき生活のあらゆる面での非暴力の実践というサッティヤグラハを見いだしたのである。<sup>3)</sup> 南アフリカでのサッティヤグラハの実践を通して、ガンディーは、自分を迫害する者をも愛する自己放棄(self-renunciation)を目指して、あらゆる人々、特に最も抑圧され困窮している人々への無私の奉仕者を人間の理想像とするに至った。そして20年以上過ごした南アフリカを去るときにはガンディーは「西洋仕込みのエリート弁護士」から、半奴隷的な制度の下で南アフリカで働いていたインド人契約労働者たちと自らを同一視するに至るまで大きく変貌を遂げていたのである。

南アフリカでのサッティヤグラハ運動の一つの大きな特徴は、強大な南アフリカ政府に対して少数者で何ら権力のないインド人社会が非暴力に徹し自己犠牲を受容するという方法で抵抗し、そのため困難の連続であったにも関わらず、ガンディーと共に闘いガンディーを支え続けた人々の多くはムスリムであったことである。このことの重要性は当時英帝国の要として植民地支配下にあったインド本国ではすでにヒンドゥー教徒とムスリムの対立を促すコミュニズムが特に都市において展開しつつあったことから明らかである。しかし時には南アフリカのインド人社会でも、些細な問題からヒンドゥー教徒とムスリムの間で互いへの不信感や恐れから誤解や対立が生みだされることをガンディーは経験し、その対応に苦慮しなけりなかつた。このためガンディーは南アフリカでの活動を終えてインドに帰国する際に、自らの掲げる非暴力・アヒンサーの最も厳しい試練となるのはこのヒンドゥー教徒とムスリムの問題であろう、と予測していた。<sup>4)</sup> すでに述べたように、インドに帰国したガンディーはインドにおける真の自由、スワラージに不可欠であるとしてヒンドゥー教徒とムスリムの融和問題を最重要課題の一つとして掲げていたが、その解決法として、ガンディーは南アフリカでの経験に基づいて、非暴力の実践であるサッティヤグラハをインドで普及し、ヒンドゥー教徒とムスリムの間に真の友情を育てるために無私の精神で努力することが必要であると考えていた。このような問題意識からガンディーは第一次世界大戦後のインドのムスリム指導者たちにとって大きな政治的関心事であった敗戦国オスマン・トルコ帝国のカリフをムスリムの宗教的指導者としての正当な処置を求めるというキラールファット運動に、積極的に関わったのである。<sup>5)</sup>

ガンディーはキラーフアット運動に関わるムスリム指導者たちやイスラームの宗教的指導者たち(ウラマー)との親密な信頼関係を獲得し、ヒンドゥー教徒でありながらこの運動の指導権を委任された。さらに、全インド的な民族運動の主要な担い手として1885年以来活動していたインド国民会議派 (Indian National Congress、以下会議派)において1920年からガンディーは指導権を与えられ、キラーフアット運動と連携した形で非暴力的非協力運動(第一次サッティヤーグラハ運動)がインド全体を包み込んで展開した。この出来事はインドの独立運動史においてヒンドゥー教徒とムスリムとが肩を並べて闘った貴重な経験となった。<sup>6)</sup> その原動力は、ガンディーが不正を正そうとしない英国支配体制への強力な抗議運動を「一年でスワラージを」という自治獲得要求へと方向づけ、その要に非暴力を掲げたことによって、当時のインドの民族運動における様々な立場の相違を越えた一致が可能となったことである。しかし、ガンディーと異なり、多くの指導者たちはあくまでも新しい有効な手段として非暴力を受容したにとどまっていた。そのため非暴力の実践が困難に直面した時に、非暴力は容易に放棄された。1922年にチョウリ・チョウラという小さな町でスワラージを求める示威行動を行っていた民衆が警官を殺害するという事件が起き、ガンディーはインド全体が暴力的な方向へ進んでいることが明らかになったと判断して非暴力的非協力運動を停止した。これまでにないほど多くの民衆が参加し自治獲得運動の勢いがまさに頂点に達しているように思われるときにガンディーが非暴力を遵守するために運動を停止したことに対して、大きな失望感が広がった。特にキラーフアット運動のムスリム指導者たちは批判的であった。その後の展開で明らかにされたが、原則としての非暴力が放棄されたとき、ガンディーを要としていた会議派内の諸派とキラーフアット運動の協力体制も崩壊した。

具体的な例ではガンディーがキラーフアット運動に関わった過程で親交を結んだムスリム指導者の一人モハメッド・アリーは、非暴力を自らの信念としては受け入れられないことを当初から明らかにしていたが、それでもガンディーを指導者とするにあたって非暴力に徹することを約束していた。キラーフアット運動の崩壊以降モハメッド・アリーはガンディーと次第に疎遠になり、1930年代にはガンディーをあからさまに攻撃する側へと立場を変えていった。こうした例から、ムスリムにはガンディーの非暴力の立場は共有できないと判断することは容易い。特にイスラームにおいては宗教と社会(政治体制、法体系など)の一体性が強調されることや、異宗教に対する非寛容性や、預言者ムハンマド以来聖戦は正当化され暴力は肯定されてきたという一般的なイメージがある。それに対しヒンドゥー教は混沌を許容し、あらゆる宗教を包括する寛容性を持ち、基本的に非殺生・非暴力を基盤としていると一般化されている。さらにはより単純化されたもので英国支配下において普及された、軟弱で女性的なヒンドゥー教徒と男性的で戦闘的なムスリム、という対比的イメージもある。しかし、こうした一般論からヒンドゥー教徒にとって非暴力は受容されやすく、ムスリムにはそうでないと判断することはあまりにも短絡的であり、コミュニナリズムの見解を強化する考え方であることは指摘されている。<sup>7)</sup> 分離独立前後にヒンドゥー教徒とムスリムの間で展開した残酷なまでの殺し合いを見て

も、今日のヒンドゥー原理主義のテロ活動を見ても、ヒンドゥー教徒は非暴力的であるとはとても一般化できない。一方、今回取り上げるアブドゥル・ガッファー・カーンの見解によると、信念としての非暴力の実践はムスリムとして生きることと切り離すことはできないのである。しかしあくまでもそれは例外者としての生き方であった。それではアブドゥル・ガッファー・カーンのこの確信と行動はどのように生み出されたものであるかを検討してみたい。

#### アブドゥル・ガッファー・カーンの知的遍歴

アブドゥル・ガッファー・カーン、別名バドシャー・カーン(「王者の中の王」の意味)は90%以上がムスリムであるインドの北西辺境州(North West Frontier Province)の人々の自由のために闘い続けた指導者である。北西辺境州はインドとアフガニスタンとの国境にある高地であり、その地に住むパタン人(パクトゥーン族)は勇猛果敢で優秀な兵士であることで知られていた。パタン人は自給自足、自主自尊の精神を尊び、簡素な厳しい生活を送る誇り高い人々であった。荒涼とした山岳地方には略奪行為で悪名をとどろかせていた山岳部族民が住み、自然に恵まれた豊かな丘陵には農民が住んでいた。古くはガンダーラ文化が栄え、仏教の遺跡も数多く残されている土地であり、彼らの言葉であるパシュトゥ語はサンスクリット語に非常に近い言葉であった。しかし英国支配は北西辺境州を防衛重点地域として特別視し、1901年に特別地域としてパンジャブ州から分離させた。北西辺境州ではインドの他の地方で認められていたような限定された自治さえ与えられず、防衛の名の下に警察国家のような厳しい規制が行われ、山岳部族民と農民の間は英国支配によって完全に分断されていた。そして道路の整備、軍事基地の設営など軍事的な事業が優先されたため、学校や病院などの厚生施設が極端に少なく、殆どの人々は文盲であった。わずかながらも存在する学校も隣のパンジャブ人がウルドゥー語で教えており、母国語によるものではなかった。この結果北西辺境州は教育的に、また文字による文化の面でインドの中で最も遅れた後進地域の一つとなっていた。他の地方のインド人は、パタン人を野蛮で乱暴であると恐れていた。実際にパタン人の間では血族同士の抗争が激しかったが、ガッファー・カーンはこうした対立や分断を英国支配が利用し拡大することによって絶対的権力を掌握しパタン人を奴隷化していると考えていた。その悲惨から人々を救済するために、武器を捨て非暴力に徹して闘うクッダイ・キットマッガール(Khudai Khidmatgar, Servants of God・「神の奉仕者」団)が組織されるに至った。ガッファー・カーンとクッダイ・キットマッガールの存在はガンディーの持っていた、非暴力とは武器を用いることのできない弱者の選ぶ方法ではなく、むしろ闘うことを知っている勇敢な戦士が非暴力を選んだときにこそ真のサッティヤグラヒー(サッティヤグラハの実践者)となることができるという確信に決定的な裏づけを与えた。1920年代後半から次第にコミュニズムの立場を激化していったキラファット会議やムスリム連盟<sup>8)</sup>によって会議派はヒンドゥー教徒の組織であるという中傷攻撃や批判が展開されたが、その中でガッファー・カーンとクッダイ・キットマッガールは会議派と一体となってインドの独立を目指して闘い、宗教の相違を越えたインドの一体性(ユニ

ティー)を象徴する存在となったのである。さらに、その後ガンディーの指導の下で独立運動を展開してきた会議派の指導者たちが、間近に迫った独立の獲得に向かって非暴力を放棄していく中で、ガッファー・カーンは最後までガンディーと行動を共にし、非暴力を信念として貫いた。このようなガッファー・カーンの生きる方向性は常に敬虔なムスリムとしての信仰に基づいていた。このガッファー・カーンとはどのような背景から生み出された人物であろうか。<sup>9)</sup>

ガッファー・カーンの父バハラム・カーンは北西辺境州のパタン人の裕福な地主であり地方のまとめ役であるカーン(長)であった。ガッファー・カーンの祖父も曾祖父もその地に名だたる偉大なカーンであり、闘いにおいては死を恐れない勇士であった。父は預言者ムハンマドの末裔として生きる敬虔なムスリムであった。パタン人の間では一族の受けた恥辱に対しては血をもって復讐することが勇敢なパタンの義務(バダルの掟)であるとされ、時には世代を越えて一族の復讐が受け継がれていたが、父は例外的に寛大で人を赦すことを信念としていた。そして弱いものの立場に身をおいて彼らを守ることを自らの義務とした。誠実で争い事が嫌いな穏やかな人格者であり、村人の絶対的な信頼を集めただけでなく、地域のイギリス人行政官にも信頼されていた。また、パタン人の掟では村に旅人が訪れると食事や宿泊場を与えてもてなすのが習慣であったが、ガッファー・カーンの父は旅人を神からの使者として自ら食事を運び心を込めてもてなすことを常としていた。一方ガッファー・カーンは母親の影響も強く受けたようであるが、母は清らかで優しく、日々祈りを欠かさず、時には沈黙の瞑想に我を忘れるような敬虔な信仰者であった。物惜しみをせず、食べ物を料理しては近所の貧しい人々に自分の手で配っていた。ガッファー・カーンは兄一人と姉二人の後の末っ子であり、母に特別愛されていたようである。このような両親の下でガッファー・カーンは育てられた。

ガッファー・カーンは5歳の頃から村の寺院(モスク)のムッラー(寺のムスリム僧)に教えられ、コーランを全部暗唱できるようになった。両親は大変喜び、次にガッファー・カーンをペシャワールという北西辺境州の中心的な町の学校へ行かせたが、これは非常に珍しいことであった。当時村のムッラーはイスラームに基づいていない西洋的な教育に対して非常に攻撃的であり、また北西辺境州には高等教育を受けられる学校が少なく、大学教育にいたってはパンジャブ州に行かなければならなかった。ガッファー・カーンの兄は彼らの村で町の学校教育を受けた最初の子供であり、兄はさらにボンベイで教育を受け、英国留学をして医学を学んだが、彼らの両親が敬虔な信者であり村の人々に尊敬されていたのでムッラーもこれをじゃまできなかつた。ガッファー・カーンは教育を受けることができたことについて、ガッファー・カーンは両親の教育への熱心さや、古い因習にとらわれない広い心や自由に行動する勇気への感謝を表している。<sup>10)</sup>

その後、ペシャワールのキリスト教宣教師が運営していた学校へ進んだガッファー・カーンは校長であり宣教師であるイギリス人のE. F. E. ウィグラム先生の生き方に深い感銘を受けた。パタン人たちが貧しい同胞を無視している中で、この校長と医師の兄弟は遠い異国に来て異教

徒のために私財を投じ、学校と病院をつくり、奨学金を与え、パタン人に奉仕しながら共に生活を送っていることをガッファー・カーンは身近に見て生活したのであった。ガッファー・カーンはこのウィングラム兄弟に神の創られた全ての人々に奉仕する精神を教えられ、自分も同胞のために献身したいという望みを持つに至ったと述べている。<sup>11)</sup>

一方血気にはやるパタン人として誇り高い兵士への憧れをガッファー・カーンも若い頃から持っていた。ガッファー・カーンは16歳の頃、軍人としての華やかな栄達について召使いの者から吹き込まれ、軍人になろうと申請し、選ばれて士官としての入隊が認められることになった。それはパタン人にとって非常に名誉なことであり、父はこの幸運を大変喜んだ。そこでガッファー・カーンは卒業試験を放棄してベジャワールの軍隊へ赴いた。しかしそこで騎馬隊の士官であったパタン人の友人がイギリス人の将校によって侮辱されて一言も言い返せない姿を見て衝撃を受け、入隊を放棄した。パタン人にとって、名誉を守るために闘うことは当然のことであったからである。入隊を断念したことを父は大反対したがガッファー・カーンの決意は変わらなかった。

卒業試験を放棄したため大学進学への道は断たれ、ガッファー・カーンは自分のなすべきことを探して故郷を離れて模索を続けていたが、ますます北西辺境州における英国支配による圧制や、パタン人同士の猜疑心や抗争から逃れなければ自分の将来はないように考えていた。こうした行き詰まりの中で、英国に留学していた兄がガッファー・カーンにロンドンで工学を学ぶことを勧める手紙を送り、父を説得してくれた。すっかり準備も整いガッファー・カーンは留学を母に祝福をしてもらおうと帰郷したところ、母は涙を流して行かないように頼んだ。母には息子が二人とも外国へ行ってしまおうということが耐え難かったのである。ガッファー・カーンは母を説得できなかったので、母の気持ちをくんで留学を取りやめた。そして、この時にこれから自分は北西辺境州で苦しんでいる同胞のパタン人に奉仕することを通して神に献身することを決意した、と述べている。<sup>12)</sup>

ガッファー・カーンは最初どのように行動したらよいのかと考え、まず自分のできることは地域で学校を作ることを通して村人たちに働きかけ、文盲と無知を無くし、パタン人の社会を改善することと思立った。そして村で農業を営む傍ら友人たちと幾つかの学校を始めた。また、北西辺境州は軍事的な重要性からインドの他の地域から隔離されたような状況にあったが、ガッファー・カーンの眼はインド全体に展開しつつあったムスリム知識人の新しい動きへも注がれていた。例えばガッファー・カーンはカルカッタ出身の若手ムスリム知識人 A. K. アザードの『アル・ヒラルル』などのウルドゥー語の新聞を購読し、周囲の人々にも読んで聞かせていたが、こうした行為は当局に危険視されていた。当時画期的であった『アル・ヒラルル』の定期購読者は北西辺境州ではブラックリストに載せられていたのである。息子を心配した父はガッファー・カーンに土地を与え、結婚させて落ち着いた生活を送ることを願ったが、ガッファー・カーンの心の内にある困窮している人々へ奉仕したいという願望は消えなかった。

1913年にアザードが講演することを知り、ガッファー・カーンは連合州のアグラで開かれ

るムスリム連盟の会議に出席し、これが直接のきっかけとなって全インド的な政治運動と関わるようになった。こうした中でガッファー・カーンにとって生涯を決定する出来事が訪れた。それは1914年のことであるが、北西辺境州で農民のパタン人が入ることすら禁じられている山岳地域の部族民に対して指導者から全インド的な運動について啓蒙活動をするための拠点を作ることを指示されたガッファー・カーンは、危険を冒して厳しい警備をかいくぐり山岳地域の村に潜入した。そこで仲間と連絡を取ろうとしたが動きがとれなくなり、途方に暮れたガッファー・カーンは村の小さなモスクにこもって数日間断食し、一体何を自分はなすべきなのか、とひたすら祈りを捧げた。そして、ある朝ははっきりとした答えを得たのではなかったが、ガッファー・カーンに内側から強い確信が与えられた。それは神に全てを委ねて献身し神の力を知ることこそがイスラームの真の意味であり、神の創造された人間に奉仕することこそが彼のなすべきことであるということであった。それは召命を受けるという経験であり、ガッファー・カーンは自分の体の底から力が湧いて体中を満たすのを感じた。この経験後のガッファー・カーンの生涯はこの時の神の招きに応じて一心に進んだ歩みであった。<sup>13)</sup> この時にはまだ明確にはなっていなかったが、次第にガッファー・カーンは一つの大きな夢をもつようになった。それはまずパタン人が同胞として、互いの苦難と歓びを分け合いながら互いに平等の人間として助け合うようになり、そしてインドの中でパタン人がそれにふさわしい役割を果たすようになり、ひいては神と全ての人類に奉仕するようになることであった。<sup>14)</sup> その夢に向けてガッファー・カーンは次のような願望を持つに至った。それは本来優しくて勇敢で愛国的なパタン人をおとしめ辱めている外国支配による圧制から救済し、自由な世界で平和に喜びの内に生きることができるよう、彼らの略奪された大地に口づけし、汚された道を掃除し、破壊された家を修繕し、血で染まった服を洗い清めたいという願いである。<sup>15)</sup> このようにガッファー・カーンの志はパタン人を現在の悲惨な状況から救いたいという単純な動機から生まれ、政治的な運動との関わりは、パタン人にとってまず自由がなければ生きていくことができない、ということから出発している。こうしてガッファー・カーンはパタン人の学校を作り、村から村へと歩き、村人と話し合いを重ね、互いに争うことをやめるように説得し、赦しや勤勉の大切さを説いてまわり、その結果州当局から危険視され、村のムッラーや封建的な地主たちからも敵視され、学校が強制的に閉鎖されるなど様々な形での圧力や妨害を受けた。それでもガッファー・カーンはパタン人への奉仕を自分の与えられた聖なる義務として放棄しなかった。

このようにガッファー・カーンは徹底した無私の奉仕者として生きることによって自分自身の目指す方向性を見いだしたが、それは奉仕者として生きることこそ神の招きに応えることである、という信仰に基づいている。この点において、前述したようにガンディーも共通しているのである。興味深いことは、ガンディーの場合もガッファー・カーンの場合も、一人の人の奉仕者として生きるという決意が、周囲の人々に共有されて広がり、次第に大きな民衆運動となっていくことである。このため、奉仕者として生きることによって自らの召命を見いだした二人はそれぞれ稀有の指導者となったのである。その過程において見過ごすことのできないことは、多

くの苦難と艱難の連続を経験しながらもこの生き方を全うするということである。ガンディーとガッファー・カーンの詳細な伝記をそれぞれ書いたD. G. テンダルカーはガッファー・カーンの伝記の副題にその生涯の特徴を一言で表現して「信仰は闘いである」“Faith is a Battle”とつけているが、ガンディーの生涯においても同様である。

### ガッファー・カーンとクッダイ・キットマッガール：非暴力の戦士

これまでガッファー・カーンはガンディーとは全く異なる道筋をたどってきたが、この後ガッファー・カーンが全インド的民族運動との関わりを深めるに従って、ガンディーから大きな影響を受けるようになった。それはどのような過程であったかを次に検討する。

第一次世界大戦が終わり、全インド的な民族覚醒運動がガンディーの指導の下で開始した。1919年には戦時体制の延長を意味したローラット法に反対してガンディーが呼びかけたローラット・サッティヤグラハに呼応して北西辺境州でも一斉休業・ハルタルが行われ、ガッファー・カーンは逮捕され、裁判もなく6カ月間投獄された。1920年にナグプールで開かれた会議派の年次大会にガッファー・カーンは出席し、ガンディーを初めて実際に見て、その誠実さと非暴力の教えに強く引きつけられた。そして自分の故郷の北西辺境州の村に帰って国民的学校を始めたところ再び逮捕され、今度は3年間も投獄された。

投獄の経験は苦難の連続であった。ガッファー・カーンは政治囚としての扱いを受けられず、極悪犯同様に「危険人物」として手と足と首に鉄の鎖と枷をはめられたが、2メートル近い大男のガッファー・カーンにあう大きさの枷がなく、小さすぎる足枷によって皮はめくれ足首は腫れ上がった。牢獄は非衛生的で十分な衣服も毛布も与えられず、食事は「腹の空かせた猫でさえ食べなかった」ようなものであった。<sup>16)</sup> 独房に入れられる苦しみや厳しい労働の苦難もあった。しかしガッファー・カーンは牢獄の苦しみこそが自分を正しく導き、多くの貴重なことを教えてくれたという。<sup>17)</sup> 特にガッファー・カーンにとって重要であったのは、牢獄でコーランを熟読し、迫害されつづけた預言者ムハンマドの生涯から多くを学ぶことができたことである。また、厳しい生活によってガッファー・カーンは健康を損なったが、それによってインドの他の地方の刑務所へ送られ、時には同じように非暴力的非協力運動によって投獄されたヒन्दゥー教徒、シーク教徒などの他の宗教の政治囚と共に生活をし、互いの考え方やこれからのインドについて論議する機会を与えられた。そしてガッファー・カーンはこの機会に同胞の信仰について理解したいと考え、コーランだけでなく、シーク教の聖典『グル・グラント』やヒन्दゥー教の聖典バガヴァッド・ギーター、キリスト教の聖書を読み、この後も他の宗教の人々との対話を大切にするようになった。

また、他の州の政治囚よりも長く厳しい刑を服役しなければならなかったガッファー・カーンは、あまりにも多くの服役者が刑務所の中で誘惑に負けて、例えば獄吏に賄賂を与えて便宜を図ってもらったり、服役者同士の争いや悪癖に身を落としていくことを見て、どんなに劣悪な状況の中でも、たとえ一見小さな事柄であっても、いったん信念を曲げて悪習にそまったり



嘘をついた場合には、恐れが生まれ、自尊心を失ってしまうことを牢獄で学び、獄中でも決して恐れることのないように、嘘やごまかしのない正しい生活を送ることを誓った。<sup>18)</sup> そしてそのようにガッファー・カーンが生きようとすると、次第に刑務所内の空気が変わり、獄吏の中には自分の仕事を恥じて辞職するものまで現れた。3年間の投獄の苦しみを経て釈放されたとき、ガッファー・カーンはパタン人の指導者として迎えられ、いつしかパタン人たちは彼を「バドシャー・カーン」「王者の中の王」と呼ぶようになった。

ガッファー・カーンは釈放後、家族と共に念願のメッカへ聖地巡礼に行き、さらに世界へと目を開かれる機会を与えられた。アラブのイスラム指導者たちに会い、今や世界ではそれぞれの国のナショナリズムが人々を奮起させていることに気づかされた。また、同じように英国統治下にある他のアラブ諸国がインドの自治の問題に大きな関心を寄せていることを知った。またこの旅はガッファー・カーンにイスラームの意味を再確認させた。ガッファー・カーンは聖地巡礼の意味について、預言者ムハンマドが石を投げられ、殴られた時にもその人々に対して「神よ彼らに正しい道をお示し下さい」と祈ったというその忍耐と勇気を覚えるためである、と述べている。<sup>19)</sup> すなわちムハンマドは赦すことの重要性を強調していると理解したのである。ガッファー・カーンは巡礼を経ることによって、預言者に倣って生きること、すなわち同胞に、そしてさらに広く社会と国へ奉仕する決意を一層新たにした。

キラファット運動の崩壊後、インド各地でコミュニナリズムの影響が宗教的な対立や暴動という形で展開し始めていた。キラファット運動の過程でイスラム指導者たちはオスマン・トルコのカリフの危機を訴えるために、イスラムの民衆にわかりやすい形で「イスラームの危機」を訴えたが、こうして促された宗教的感情と政治との結びつきは、運動が失敗した後はヒンドゥー教徒との対立感を深めたのであった。こうした中、1924年に北西辺境州のコーハットでコミュニナリズム(宗教対立的)な暴動が起こった。圧倒的多数であるイスラムが、商店主など比較的裕福なヒンドゥー教徒を襲ったのである。ごく少数者で主に町に住んでいたヒンドゥー教徒に対してイスラムが脅威を感じる必要がなかった北西辺境州ではこうした事態はこれまではなかった。コーハットでの事件を直接の契機として、釈放されて間もないガンディーが行ったのが異なる宗教間の和解を求めての21日間の断食であった。しかしその後もインド全国で1926年の総選挙に向けて宗教的な対立を煽るような政治的言動が激しくなっていた。こうした状況の中でガッファー・カーンはヒンドゥー教徒とイスラムの融和を説いた。ここでもガッファー・カーンのイスラーム理解が基盤となっている。ガッファー・カーンの理解によると、イスラームが教えていることは「正しい行動 (*amal*, selfless service)、信仰 (*yakeen*, faith)、そして愛 (*muhabat*, love)」であり、コーランは、まず何よりも第一義的に神への信仰を強調している。そして信仰に基づいた良き行いによって人は救済を得られると教えている。それ故宗教の強さは信者の数の大きさではなく、生きる中で信仰を実践することこそが重要である。決してヒンドゥー教徒とイスラムの間の対立的状況に絶望することなく、各自が正しい方向へ努力していけば必ずその努力は無駄にはならない、と主張していた。<sup>20)</sup>

巡礼から帰ったガッファー・カーンはパタン人の教育や社会改革を地道に再開した。また、長くないがしろにされていたパタン人の母国語であるバシュトゥ語による初めての雑誌『パクトゥーン』を創刊し、文章による啓蒙活動を行った。ガッファー・カーンは母国語を大切に高めると通して、民族は再生されると考えていたのである。その主張は「パタン人よ、英国支配の隷属的状态から目を覚まし、自由を求めて一致団結し、互いに助け合おう」というものであった。多くのパタン人はインドのみならず世界各地に移民していたので、雑誌を通じてガッファー・カーンの運動は世界各地のパタン人と関わりを得ることができた。<sup>21)</sup>しかし州当局はこの雑誌をたびたび発禁した。

こうした活動に呼応した一人のパタン人の若者の要請に応じて、ガッファー・カーンは武力を誇りとしてきたパタン人の間に非暴力の実践を広め、人々に奉仕し、神への信仰に基づいた正しい生活と自尊心を身につけるためにクッダイ・キットマッガール(「神の奉仕者」団)を1929年に結成した。クッダイ・キットマッガールに加わりたいものは以下の誓いを立てなければならない。「私はクッダイ・キットマッガールとして、神ご自身は人間の奉仕を必要とされないので、神の創造物に無私の奉仕を行うことによって神に仕えます。私は決して暴力を用いず、報復も復讐もしません。私は私を抑圧し行き過ぎた行いをするものを赦します。私は陰謀や一族の反目や敵対行為に一切関わりません。私はすべてのパタン人を自分の兄弟とし同志として扱います。私は様々な悪習や悪癖を断ちます。私は簡素な生活を送り、良き行いをし、誤った行動をやめます。私は良き人格となるようにし、良い習慣を身につけるように努力します。私は私の奉仕に何の見返りも期待しません。私は恐れず、どのような犠牲も払う準備があります。』<sup>22)</sup>クッダイ・キットマッガールは共通の誓いを原点として、あくまでも自発的に人々が集まって始められた運動であった。<sup>23)</sup>そのメンバーは武器を持たず、非暴力を信念として活動したが、これはこれまでのパタン人の常識を覆すものであった。一方パタン人の間から生まれた運動であるので、その性質に合う側面も持っていた。軍隊のような規律を持ち、上から下への命令は絶対であり、旗を持って音楽に合わせて行進した。クッダイ・キットマッガールはガッファー・カーンに倣って村人を助け、村を清掃し、集会で秩序を守る役割を果たしたが、全く無報酬であり、制服も自前であった。制服の色が汚れが目立たないようにと濃い茶色のような赤であったことから、赤シャツ隊(Red Shirts)とも呼ばれた。

北西辺境州では他州にこれまで段階的に認められていた限定的な自治すら全く認められていなかったが、クッダイ・キットマッガールの運動を通して、各村に伝統的な長老会であるジルガが復活した。ジルガは英国支配以前にはパタン人社会の基盤であったが英国支配下に失なわれていた。新しいジルガは村、地区、地域、と下から上へと代表を委員会へ選出していき、最終的に北西辺境州における非公認の議会として、州のジルガ(アフガン・ジルガ)が結成された。クッダイ・キットマッガールについての最終的な決定はこの州のジルガにゆだねられていた。

クッダイ・キットマッガールの当初の目的は奉仕を通しての社会改革であって、政治的ではなかった。しかし、これまで互いに争っていたパタン人が団結することに英国支配は脅威を感

じクッダイ・キットマッガールを弾圧したが、皮肉なことにクッダイ・キットマッガールを全インド的民族運動と結びつけ、政治的運動へと変貌させたのはこの弾圧であった。1930年に完全独立を目的として掲げてガンディーが有名な「塩の行進」を行った後に市民的非服従運動が全国的に展開しはじめると、すぐに北西辺境州は戒厳令下におかれ、他の地域との連絡や往来も断たれ、他の地方の人々が知ることができない状況のなかでクッダイ・キットマッガールは当局による暴虐行為の対象とされた。当局の狙いはクッダイ・キットマッガールのメンバーを徹底的に辱め、暴力に訴えるように追いつめることであった。なぜなら、暴力的なパタンよりも非暴力的なパタンの方が英国支配にとっては脅威であったからである。しかし激しい弾圧は逆に誇り高いパタン人を刺激し、新たな団結が生まれ、1930年の4月頃までのクッダイ・キットマッガールのメンバーは500人ほどであったのが、弾圧後の1930年の10月頃には5万人に上った。そして驚くべきことにこれまでイスラームの伝統的な習慣から家庭から出ることの少なかった女性もパタン人の誇りを守るために運動に加わった。ガッファー・カーンは投獄され不在であったにも関わらず、厳しい苦難の中でクッダイ・キットマッガールは非暴力の誓いを守り通し、戒厳令の後にクッダイ・キットマッガールの意志の強固さと勇気が会議派の調査団によって全インドに知らしめられたとき、インドの人々は驚嘆したのであった。

クッダイ・キットマッガールと会議派との密接な関わりは次のような状況で生まれた。弾圧に苦しむ同志が獄中のガッファー・カーンに、北西辺境州の事態を何とかして外へ知らせ、クッダイ・キットマッガールの苦境を救ってもらうためにはどうしたらよいか、と相談した。そこでまず、ムスリム連盟の指導者へ相談することをガッファー・カーンは勧めた。しかし当時のムスリム連盟は保守的なエリートの集団であり、会議派との連帯を拒否し、むしろ英国支配を支持する立場であったので、クッダイ・キットマッガールの要請は全く拒否されてしまった。そこでガッファー・カーンは会議派の指導者たちのところに助けを求めに行くことを提案した。その時の心境は「おぼれるものはわらをもつかむ」であったという。会議派の指導者たちはクッダイ・キットマッガールがインドの独立運動に加わるなら協力と援助をすると約束した。<sup>24)</sup> この提案にアフガン・ジルガも同意し、クッダイ・キットマッガールの運動及びジルガの組織は会議派の傘下におかれることになった。会議派は北西辺境州の実態を明らかにするため調査団を送ろうとしたが、州に入る許可が拒否されたので、州外に逃亡した人々の証言を集めて報告書をつくった。こうして全インドに北西辺境州での政府による暴虐とクッダイ・キットマッガールの非暴力が知らしめられた。会議派と勇猛果敢なパタン人が連帯することを知って恐れをなした州政府やムスリム連盟は、その後たびたびガッファー・カーンを会議派から引き離し自分たちの味方につけようとしたが、ガッファー・カーンは決して屈しなかった。その理由はクッダイ・キットマッガールは人々に奉仕をすることが目的であり、支配することが目的の人々とは全く方向が異なるからというものであった。この時以来ガッファー・カーンは会議派に忠誠を尽くし、ムスリム連盟とはっきりと別行動をとった。

それではガッファー・カーンの理解し共有していた会議派の目的とは何であったのであろう

か。まず会議派はガッファー・カーンにとって、ガンディーとの関わりを意味していた。ガッファー・カーンは1920年からガンディーの指導の下で会議派が主体となって非暴力を原則とした自治獲得運動を展開してきたことに大きな影響を受け、北西辺境州での運動において参与してきた。1928年には会議派の会議に参加した際に、ガンディーが話している最中にある若者が声を上げて妨害を繰り返したのに対し、ガンディーが怒ることなく笑って忍耐強く最後まで話したのを見て、ガッファー・カーンは深い感銘を受けた。というのは、キラファット運動のムスリム指導者たちは争いが絶えなかったからである。ガッファー・カーンがモハメッド・アリーに、我々ムスリムの指導者として恥ずかしくないようにガンディーのような寛容性と自制心を持ってほしいといさめたところ、「野蛮なパタン人がこのモハメッド・アリーに何をいうか」と憤り、その全く聞く耳を持たない様子にガッファー・カーンは失望した。<sup>25)</sup>

前述したように当初ガッファー・カーンとクッダイ・キットマッガールはパタン人が武器を持って闘い、殺し合うことをやめさせたい、という思いから非暴力を誓っていた。そして1930年の市民的不服従運動の展開の中で激しい弾圧を受けてクッダイ・キットマッガールの非暴力の信念は一層堅固なものとなっていた。その後、ガンディーとの親密な関わりを通してガッファー・カーンの非暴力の理解がさらに深められていった。1931年3月にガンディーとアーウィン総督の間に協定が成立して市民的不服従運動は停止され、政治囚はすべて釈放されることとなったが、ガッファー・カーンは釈放されなかった。ガンディーは総督にガッファー・カーンは会議派であり釈放されるべきであると訴えたところ、総督はガンディーに対して、あなたは騙されている、パタン人は非暴力的ではない、自分の目で確かめるが良い、といった。交渉の末ガッファー・カーンは釈放され、すぐその後3月末に開かれた会議派のカラチ大会でクッダイ・キットマッガールとガッファー・カーンは英雄として大々的に迎え入れられた。この後ガッファー・カーンは、自分はガンディーを司令官として従う一兵卒であると語るようになった。

アーウィン総督との話し合いの結果、ガンディーは会議派の代表としてロンドンで開かれる第2回円卓会議に出席することになっていた。<sup>26)</sup> しかしガンディーは円卓会議で何らかの成果を得るためには、イギリスに赴く前にヒンドゥー教徒とムスリムの融和へ向けての実質的な合意や協力が不可欠だと考えていた。そしてこの努力にガッファー・カーンはクッダイ・キットマッガールと共に積極的に協力し、彼らの存在自体が会議派に対するムスリムの疑念を解消する大きな働きかけとなった。ガッファー・カーンはクッダイ・キットマッガールのメンバー19名とボンベイで多くの集会に出席し、ヒンドゥー教徒とムスリムの協力と融和を訴えた。その目的は会議派をヒンドゥー教徒の組織であるというムスリム指導者たちの攻撃を不当であると示すことであった。このときの演説の内容を検討すると、ガッファー・カーンの会議派理解が明らかにされるであろう。ガッファー・カーンが会議派と行動を共にし、政治的活動に身を投じたのはその理解に基づいている。そして会議派がこの目的から逸脱したときにはガッファー・カーンは会議派から離脱したのである。それではガッファー・カーンの会議派理解と

はどのようなものであったか。

ガッファー・カーンは会議派について次のように述べている。「会議派がヒンドゥーの組織だというのは間違っている。会議派の目的は専制的な支配者である英国統治を倒し、インドを自由にするることである。ジハード(聖戦)とは何か。預言者ムハンマドの教えによると、ジハードとは暴君の支配者の前で真実を述べることである。我々はムスリムならば預言者に従うべきだ。...今日我々は奴隷であることに気がつくべきである。会議派は我々みんなを自由にしようとしている。あなた方もこの隷属から自由になりたくはないのか？ 今日自由の旗はマハトマ・ガンディーの手にある。何という恥ずかしいことだ。自由の旗は我々ムスリムの手にあるべきであったし、我々はこの自由のための旗手として率先して先頭を導くべきであった。そうしていたならば、世界各国の人々が我々の後を従ってきたであろう。預言者は我々に抑圧された人々を助け、抑圧者を倒すことを教えているではないか。今日(インドでは)ヒンドゥー教徒、ムスリム、シーク教徒、パールシー、そしてキリスト者も皆抑圧されており、抑圧者は我々が自分の国にしながら我々のすべての権利を奪ったこの政府である。ムスリムはこの世で名誉ある生き方を望むのなら、抑圧された人々を助けなければならないのである。」<sup>27)</sup> このように、会議派は抑圧によって苦しむ人々を解放するために活動しているとガッファー・カーンは理解していた。

ガッファー・カーンはまた、どちらの宗教的コミュニティが多数派であるか、少数派であるか、というような人数の大きさが問題ではなく、それぞれが団結する努力をし、行動することが重要である、と述べた。ガッファー・カーンがパタン人の悲惨から学んだことは、互いに分裂し相対立することは、隷属と破滅へ向かうことであるということであった。そしてこれまでの諸宗教との対話を踏まえてガッファー・カーンが理解する宗教の本質ということも重要な点である。ガッファー・カーンによると、たびたび起きているいわゆる「宗教対立的」(コミュニカル)な暴動は、例えばムスリムの礼拝に不可欠な静寂がヒンドゥー教徒が通りで音楽を鳴らすことによって損なわれたという事件やヒンドゥー教徒にとって聖なる樹木がムスリムによって傷つけられたというような事件を契機にして、それぞれが自分たちの宗教を守るためにと暴力をふるっているが、こうした事態は自分たちが奴隷となっているため宗教とは何かを見失っているから起きるのである。では宗教とは何であろうかと問うならば、ガッファー・カーンは次のように述べている。「私がコーランやギターを研究した結果学んだことは、宗教は愛であるということである」。<sup>28)</sup> ガッファー・カーンによると、分裂し相争うことを望んでいるのは第三者のイギリス人支配者であり、彼らはヒンドゥー教徒とムスリムが兄弟として行動することを妨害しなければならないのである。「もし我々が兄弟となったならば、我々はまだ奴隷でありつづけることはできない」からである。このようにガッファー・カーンは主張し、会議派のもとでヒンドゥー教徒とムスリムが団結する重要性を訴えた。

しかし円卓会議に向けてのヒンドゥー教徒とムスリムの間の政治的対立への解決の兆しは見えてこなかった。グジャラート州バルドーリーでのヒンドゥー教徒とムスリムの合同会議にお

いてガッファー・カーンは次のように発言した。会議派をヒンドゥー教徒の組織と批判するムスリムは会議派の目的や枠組みをよく検討してほしい。会議派は人々を隷属と搾取から解放することを目的としている。すなわち、会議派の目的はインドの「飢えた人々に食物を与え、着る服のない人々に服を与えること」であり、それこそまさに預言者ムハンマドの使命である。それ故会議派の活動はイスラームに矛盾しない。また、非暴力の信念については、ムスリムにとって非暴力は決して新しい教えではなく、ムハンマドの教えの真髄は非暴力であり、我々が忘れ去ってしまっていたところ、ガンディーが再び提起してくれた、と述べた。<sup>29)</sup> このようにガッファー・カーンはムスリムとして信仰に基づいて会議派の使命を明確に理解し、会議派を積極的に支持し、非暴力を原則とすることを表明した。こうしてガッファー・カーンはガンディーにとってかけがえのない同志となった。

グジャラート州を訪れたガッファー・カーンはガンディーの四男デヴァダス・ガンディーとの対話の中で北西辺境州で非暴力がどれほどで続けられると思うかと問われて「我々はインド全体の中でガンディーの最良の弟子であることを証明できることと思います。我々はどれほどの辛苦も耐えられます。」と答えた。ガッファー・カーンの望みは、ガンディーが彼らを訪ねて直接クッダイ・キットマッガールに指導を与えてくれることであった。ガッファー・カーンは、非暴力は自分にとって信仰であり、以前からガンディーの非暴力・アヒムサを信念としていたが、北西辺境州での実験の比類なき成功によって非暴力に対する確信を得た。非暴力の訓練は誰よりもパタン人にとって必要なものであり、たとえ自分が失敗して再びパタン人が暴力の嵐の中に身を置くようなことになったとしても、自分の非暴力への信念は決して揺るがないと述べた。<sup>30)</sup>

ガッファー・カーンは6月末に北西辺境州へ帰り、各地でクッダイ・キットマッガールの集会を開き、人々に会議派とともにインドの独立を求めることと生活における勤勉や自制心を訴えて歩いた。兄カーン・サヒーブ博士も彼らの姉妹たちも運動に加わり、クッダイ・キットマッガールは10万人を越えた。ガッファー・カーンはすべての宗教の基盤は自由を求めることであると述べ、そのためにはまず互いに奉仕し団結して行動することを主張した。クッダイ・キットマッガールと会議派との関わりによってこれまでのような圧制的な支配を続行できなくなった英国支配は今度はガッファー・カーンとクッダイ・キットマッガールに対して懐柔政策を試み、会議派から離れることを説得したが失敗した。すると再び州当局はガッファー・カーンを逮捕しようとし、ガンディーはアーウィン総督との協定に反するとして強く抗議した。当局はクッダイ・キットマッガールは治安妨害の罪にあたり、彼らは暴力的だと反論したが、ガッファー・カーンはガンディーに向かって事実無根であると述べた。ガンディーは政府にクッダイ・キットマッガールの罪状を詳しく知らせることを要求したが返答はなかったので、ガンディーはガッファー・カーンの言葉が真実であることを信じた。

こうしたやりとりからガンディーは北西辺境州を訪れてその実状を知り、クッダイ・キットマッガールの活動を見るのが不可欠であると考え、ガンディーかJ. ネルー<sup>31)</sup>が州に入るこ

とを許可するよう要求したが、拒否された。交渉の末ようやくデヴァダス・ガンディーが、公の場で演説しないなどの条件つきで、北西辺境州を訪ねる許可を得た。デヴァダスは6日間の旅の間、各地でクッダイ・キットマッガールに対する不当な迫害や残酷な仕打ちを見た。クッダイ・キットマッガール自身がしばしば残酷な暴行の対象になっていただけでなく、地代の税金を集めるために通常は公の場に出ることのない女性たちを役人たちが戸外で尋問し、払えない場合灼熱の太陽のもとで水も与えられずに数日間立たせたままにさせるなどの拷問も目撃した。女性に対する侮辱はクッダイ・キットマッガールを暴力に駆り立てるための挑発行為であった。また、クッダイ・キットマッガールの税金は容赦なく取り立てるが、親政府的な人々は税金を徴収されない、という不公平も公然と行われていた。訪問の途中でデヴァダス自身も命を狙われた。デヴァダスの視察によって、ガッファー・カーンたちのおかれている厳しい状況が明らかになった。その中でデヴァダスが感動をもって発見したのはパタン人のガッファー・カーンに対する深い愛情と徹底的な忠誠心であった。それによって彼らの非暴力の誓いは遵守されていた。ガッファー・カーンへの敬愛はクッダイ・キットマッガール運動に批判的なパタン人にも見いだされた。<sup>32)</sup> デヴァダスによる報告を踏まえて、ガンディーは早速総督に手紙を書き、北西辺境州での抑圧的措置に抗議し、調査委員会の設置を要求した。そして協定が守られないならば、円卓会議に出席しないと主張した。総督との話し合いの末ガンディーは、円卓会議への参加を改めて承諾した。北西辺境州についての政府の公約は得られなかったが、少なくとも会議派の注意が北西辺境州に払われているため、政府による暴虐はもはや無視されないことが明らかにされたのであった。

ムスリム連盟からの会議派に対する協力の約束を得られないまま8月末にガンディーは円卓会議へと出発した。そしてガンディー不在の間に、再び事態は緊迫した。新たにウイリンダン総督が赴任し、中央のインド政庁は州当局が強硬策を用いることを容認し、政府は北西辺境州だけでなくベンガル州や連合州などで抑圧的な政策をとり、不穏な空気が広がっていた。ガンディー・アーウィン協定によって市民的非服従運動は停止された中でクッダイ・キットマッガールの活動は続けられ、ガッファー・カーンは力強く人々に語り、目を覚ますことを呼びかけていた。ガッファー・カーンたちの活動を妨害するために英国支配は彼らとアフガニスタンとの関係やソビエト・ロシアとの関わりまで持ち出して嫌疑を広めようとした。<sup>33)</sup> 北西辺境州の政務長官によって無理矢理に出頭させられたガッファー・カーンはこうした嫌疑を否定し、北西辺境州がインドの他州と同等の自治や改革が与えられることを要請した。しかし1931年12月末には他の地方に先んじて北西辺境州では軍隊が動員されて武力による攻撃が再開され、ベシャワール近辺でガッファー・カーンや兄カーン・サヒーブ博士を初めとした4千人以上が一斉に逮捕された。その直後ネルーも連合州の自宅近くで逮捕された。その数日後、成果のなかった第2回円卓会議から帰国したガンディーは会議派運営委員会と共にガッファー・カーンたちの逮捕に対して抗議し、総督との会談を要請したが、全く拒否された。それどころか、1932年に入ると会議派そのものが非合法化され、インド全体で弾圧が始められ、ガンディー

を初めとした会議派の指導者たちは一斉に逮捕された。

北西辺境州はあたかも戦場であった。クッダイ・キットマッガールの非暴力の原則は守られていたが、あまりにも州当局の制裁措置が激しかったので、これまでクッダイ・キットマッガールの影響の及んでいなかった山岳地帯の部族民も武装蜂起し、これに対し英国空軍が動員されて容赦ない空爆が行われた。

一方ガッファー・カーンは危険人物として独房に入れられ、最も低いランクの囚人として扱われ、非常に困難な投獄生活を送った。その後健康を害したため当局が兄を同じ牢獄に移動させ、多少条件が改善された。ようやく3年後に兄弟は釈放されたが、彼らの多大な影響力を恐れた州当局の要請によって北西辺境州とパンジャブ州に入ることが禁止されていた。

### ガンディーとガッファー・カーン：宗教の相違を越えた結びつき

カーン兄弟は北西辺境州から追放されていた期間中、かなりの月日をワルダのガンディーのアシュラム(共同体、道場)で生活し、ガンディーと話し合い、共に祈った。<sup>34)</sup> ガッファー・カーンはガンディーのアシュラムの生活の要である祈りの会で、コーランを朗唱することが日課となった。また、ガッファー・カーンは祈りの会で朗唱されていたヒンドゥー教のバジャン(神を讃美する歌)が自分の魂を満たす、と言ってその歌詞をウルドゥー語に訳してもらった。兄のカーン・サヒブは医者であることを生かして近隣の村人やアシュラムの人々の病気を診療した。こうして生活を共にしてガンディーとカーン兄弟との間に強い友情が生まれ、ガンディーはこの友情について「神からの贈り物のようである」と書き記している。<sup>35)</sup>

二人の友情を直接知る者として、ガンディーの片腕であった秘書のマハデヴ・デサイはガッファー・カーンについて記しているが、デサイは、ガッファー・カーンのような透明な純粋さと禁欲的生活の厳しさと、そして他者への大きな慈しみと神への生きた信仰とを合わせもっているムスリムを他に知らない、と述べている。<sup>36)</sup> ここで特に重要と思われるのは、ガッファー・カーンがガンディーに従うことにしたのはなぜか、という点が明らかにされていることである。デサイによると、ガッファー・カーンはガンディーの生涯を神への服従というものさしで計り、その一点においてガンディーにしっかりしがみついていると指摘している。ガッファー・カーンはガンディーの指導者としての声望や政治的な活動や、革命の精神に惹かれたのではなく、ガンディーの禁欲的な生活と自己浄化への徹底した歩みが最大の魅力であったからであり、ガッファー・カーン自身も1919年以降ずっとこの道をたどってきているとデサイは述べている。このことを、ガッファー・カーン自身の言葉で言い換えると、神の御心へすべてを委ねる絶対的帰依に生きているということがガンディーの素晴らしさであり、それに深い共感を覚え、自分自身もそれを指針としているということであった。<sup>37)</sup>

ガッファー・カーンはガンディーの生活から学ぶ努力をしたが、ガンディーもガッファー・カーンから学ぶことが多かった。ガッファー・カーンの生活は祈りを中心とし、まさにイスラム・神への帰依の精神を生きていた。ガンディーはまた、ガッファー・カーンの生き生き



としたイスラーム理解に深く共感していた。例えば具体的なことでは、ガンディーはたびたび何日間もの断食を実行していたがそのことについて他のムスリムから、ムスリムには丸一日以上の断食は禁じられていると批判されていた。ガッファー・カーンによると預言者ムハンマドは何日間もの完全な断食を行っていたのであり、ムスリムがラムザン(断食月)の間、日中は断食するが日が暮れると食事をして良いとされているのは、人間の弱さを考慮した慈悲から生まれた決まりであり、それだけをムスリムの正しい断食であるとするのは間違いである。実際自分自身も水だけ取る断食を7日間行ったことがあると述べた。また、ガッファー・カーンはすべての宗教はそれぞれの文化に根ざした表現をとっており、世界全体に一つの宗教しか存在しない状況は考えられない。それぞれが自分の宗教によって力を与えられるが、他の人々の信仰を妨げてはいけなく、また宗教の違いを理由にお互いを拒否したり差別を行うことは正しくない、と考えていた。しかしこうしたガッファー・カーンのイスラーム理解は多くのムスリムに共有されず、特に正統派のムスリムには異端的と否定されていることも自覚していた。このことについてガンディーとの対話の中でガッファー・カーンは率直に「10万人のムスリムの内一人ですら真のイスラームの精神を理解していないのではないのでしょうか。」と述べている。<sup>38)</sup>

以前からガッファー・カーンは、ガンディーに倣って週に一度の沈黙の日を守り、ギターを学んでいたことから、彼はガンディーに影響されて、ヒンドゥー教徒になったなどのあからさまな批判を受けていた。しかしコミュニナリズムの深刻化の中でムスリムの信仰に関して意見を述べることに慎重にならざるを得なくなっていたガンディーにとって、ムスリムとして真摯に信仰を深めていく日々の実践によって裏付けられているガッファー・カーンの証言は非常に貴重であり、かけがえのないものであった。

このように共に生活する過程でガッファー・カーンとガンディーにとって、ガンディーが北西辺境州を訪れ、クッダイ・キットマッガールに直接会い、いずれはその村で共同体を作って生活することが夢となった。クッダイ・キットマッガールが本当に非暴力の精神を実践しているならば、ヒンドゥー教徒とムスリムの融和と非暴力をインド全体に広めるための大きな推進力となることが期待された。また、クッダイ・キットマッガールの非暴力の理解をさらに前進させるためにガンディーはクッダイ・キットマッガールに糸紡ぎ車(チャルカ)、手織り布(カッディー)などの村落手工業を伝えたいと考えていた。その背景として、この頃のガンディーは政治から引退しようと真剣に考えていたことを指摘しておきたい。ガンディーは1932年にガンディーがハリジャン・神の子と呼んでいた不可触賤民をカースト・ヒンドゥーとは別のコミュニティーとする分離選挙制度を英国支配が新たに導入しようとした時に、この制度は彼らの差別を永続化すると抗議して獄中で命がけの断食をおこなって以来、特に彼らの差別を撤廃し、その社会的、経済的地位の向上のためにハリジャン運動に専念することを希望していた。また、手工業の復興などによる農村の経済的自立のためのスワデーシ運動にも力を注いでいた。しかし、ハリジャン運動、スワデーシ運動、そしてヒンドゥー教徒とムスリムの融和を

進める運動を包含したガンディーの建設的プログラムに対する信念が会議派において共有されていないことが次第に明らかになっていった。会議派の指導者たちの多くはむしろ立法参事会の選挙に参加し政治的な権力を追求することを求め、選挙を巡って互いの間で対立や闘争が起こっていた。こうした状況が耐え難くなったガンディーは、一ヶ月間悩み抜いた末1934年9月に正式に会議派の会員を辞める決意を表明した。サッティヤーグラハこそがスワラージ(自由)への最大の武器であるという確信をもって積極的に関わる人々の手によってサッティヤーグラハは守られなければならない、という考えが決定的であった。<sup>39)</sup> ガンディーは会議派を辞任したが、会議派との関わりを切ったのではなく、会議派のもとに全インド村落手工業協会(All India Village Industry Association, AIVA)を設立し、今後はこうした組織を中心として活動を行うこととした。<sup>40)</sup>

一方ガッファー・カーンも「政治」に対する嫌悪感を深め、ガンディーと共に生活する過程でむしろ貧困に苦しむ農民のために村落手工業を普及することを強く望むようになった。その契機は北西辺境州への帰還が許されない中で請われてベンガル州を訪ねた経験であった。カーン兄弟はカルカッタでヒンドゥー教徒とムスリムの融和のための集会で発言し、その際にガッファー・カーンは、パタン人は以前は殺人を何とも思わずたえず争っていたが、非暴力の教えによって、人間の性質まで変わった。円卓会議などは時間の無駄であり、我々は犠牲を払い団結して働かなければ何も得られないだろうと述べた。そしてクッダイ・キットマッガールは宗教的な運動であり、ナショナリズムの運動ではない。前者は平和を意味し、後者は戦争を意味する。非暴力によって抑圧者と闘い自由を得ようではないか、と呼びかけた。このような発言はガッファー・カーンの政治への失望感を表していた。<sup>41)</sup> この直後ガッファー・カーンはベンガルの農村を巡り、そこで貧しいムスリム農民たちに会い、彼らのあまりに厳しい困窮生活に心を痛めた。そして手紡ぎ車によって得られるわずかな賃金でさえも貴重な収入となることを実感し、帰郷できない中で今後はベンガルの農村で村落手工業運動に関わることを決心した。同時にカルカッタなどベンガル州の都市のムスリムの指導者たちが農民たちの苦境に全く無関心であることに失望した。

1934年10月にガッファー・カーンはガンディーとともにボンベイでの会議派大会に参加し、ここでガンディーは会議派からの脱退を宣言し、全インド村落手工業協会の設立の決議を提起し、それをガッファー・カーンが支持した。ガッファー・カーンは会議派が本来の目的から逸脱していることを憂慮し、会議派がインド全体に奉仕することを目指しているならば、インドの人口の90%以上を占める農民のことを考慮しなければならないと訴え、ベンガルの農民の困窮について話した。そしてスワデーシ運動の重要性を確信していることから、指導者たちが率先して手紡ぎ糸と手織布を作ることを学び普及することを訴えた。<sup>42)</sup> ガッファー・カーンにとって、あくまでも会議派の目的は「飢えた人たちに食べ物を、服のない人たちに服を」であり、宗教の違いを越えた同胞意識に立って、抑圧されている人々を助けることがその義務であり、政治的な独立もそのために必要であると信じていた。このような目的を見失ったならば会

議派はもはやその義務を果たせなくなるとガッファー・カーンは理解していたのである。

ガッファー・カーンはこの後ワルダのアシュラムで再び逮捕された。この時にガッファー・カーンが牢獄から自由であったのははわずか 100 日間であった。ガッファー・カーンは娘と息子の教育をガンディーに託し、心穏やかであるが、ただベンガルの農民との約束を果たせないことだけが残念であると述べた。しかし釈放されるのも投獄されるのも、すべて神のなさることであり、神の御心のままに、と言ってガッファー・カーンは連行されたとマハデヴ・デサイは記し、その姿勢に感動し、彼はまさに「真の神の奉仕者」であると述べている。<sup>43)</sup>

#### クッダイ・キットマッガールとガンディー

ガッファー・カーンは今回の約 2 年間の懲役で健康を著しく損なったが、1936 年の 8 月によりやく釈放された。依然として北西辺境州への帰郷は許されないままであり、ガッファー・カーンはワルダのガンディーのアシュラムを第二のわが家として帰ってきた。この 2 年間にインドの政治は大きく変動していた。1935 年に新しいインド統治法が成立し、中央の支配からある程度独立した州内閣の設立が認められることになり、有権者数も拡大されて選挙運動が展開していた。<sup>44)</sup> 会議派はネルーの指導のもと全力で各州の選挙運動に参加し、1937 年初頭には大躍進を遂げ、国民の支持を広く受けていることを示した。しかし、選挙は政治的分裂や対立を深刻化するという結果をもたらした。北西辺境州では州外に追放中のカーン・サヒーブ博士を中心とした会議派が第一党となったがその一方で、ムスリム連盟は北西辺境州では 1 議席も得られず、やはりムスリム多数のパンジャブ州でも 1 議席のみに終わった。こうした選挙結果から、ムスリム連盟こそが全インドのムスリムの代表である、という主張は根拠が弱いことが露呈された。この敗北経験の後ムスリム連盟は一層コミュニナリズムの立場を全面に押し出して攻撃的に変化していくのである。<sup>45)</sup>

ガッファー・カーンは選挙運動よりも農村での建設的プログラムに関心をもって、ガンディーのもとで学んでいたが、兄が北西辺境州の首相に就任し、ようやく 1937 年 8 月の末に帰郷することが許された。人々は喜びのうちにガッファー・カーンを迎えた。そしてその秋には会議派議長であったネルーが北西辺境州を訪れ、華々しく迎えられた。ネルーもカーン兄弟の故郷を訪問し、クッダイ・キットマッガールの熱意と規律正しさと子供のような素朴さに感動し、わずか三日間の旅であったが、北西辺境州の訪問によって、インドの一体性(ユニティ)を強く自覚したとネルーは述べている。<sup>46)</sup>

ガンディーもようやく念願がかなって 1938 年に二度にわたってガッファー・カーンとともに北西辺境州を訪れ、心から感動した。特に 1 カ月にわたる 2 度目の旅は『平和のための巡礼』という題でガンディーの秘書の一人であり、ガンディーの詳細な伝記を著したピヤレラルによって記録されている。<sup>47)</sup> ガンディーは病身をおして北西辺境州を訪ねたが、ガッファー・カーンとクッダイ・キットマッガールのメンバーたちに出会って実際に彼らの活動を見ることによって力を与えられ、旅の期間中ずっと精神的に高揚していたという。ガンディー

を迎える隊列は騒音も乱雑さもなく、驚嘆すべき規律を守っていた。ガンディーの朝夕の祈りの集会に沢山のクッダイ・キットマッガールが集まったが、そこには物音一つしない静寂さがあった。日中もガンディーたちの邪魔にならないように非常に静かであり、礼儀正しかった。<sup>48)</sup>

ガンディーはクッダイ・キットマッガールのメンバーたちの各地の集会で、非暴力について話した。<sup>49)</sup> そこでガンディーは彼らの不屈の闘志を称えながら、彼らの非暴力は本物であるか、と問いかけた。真の非暴力とは勇者の非暴力であり、武器を持たず暴力を用いない方が、武器を持ち暴力を振るときよりも一層恐れがなく勇気がわいてくる場合、それこそが本物の非暴力であると話した。サッティヤグラヒーとして生きることはどのようなことか。闘うことである。ただし、非暴力の実践によって、である。その基盤には神への信仰を持つものは恐れることはない、ということがある。そして神への生きた信仰とは人類すべてが同胞であるということを受け入れることであり、すべての宗教に対して同じように敬意を払うことである。また、神への信仰に生きるものは、あらゆる困難や試練を耐えなければならないが、そのためには真実であることへ向けての自己浄化の訓練が日夜必要である。このようにガンディーはクッダイ・キットマッガールのメンバーに語った。ガンディーの理解ではクッダイ・キットマッガールは非暴力の道の入り口に立ったばかりであり、これからカッディーの普及や村落の手工業を促進するなどの建設的プログラムを展開しなければならないと教えた。

ガンディーは、素朴なクッダイ・キットマッガールの兵士たちと彼らのガッファー・カーンへの圧倒的な信頼と愛を目の当たりにして、パタン人のような勇気と忍耐力と広い心をもった人々が、人々への無私の奉仕に生きる指導者の下に集まったとき、武器を捨て、非暴力に徹することを誓い、実践しようとするという「奇跡」が起こるということに改めて感動した。ガッファー・カーンはクッダイ・キットマッガール以外のパタンの人々にも広く敬愛されていることも、実際に北西辺境州の各地を共にまわって見ることができた。

そのように指導者としての信頼と敬愛を一身に集めていたガッファー・カーンであったが、その謙虚さは有名であった。彼は3回も会議派の議長に推挙され、それは大変名誉なことであったにも関わらず、3回とも辞退した。その理由は自分はいくまでも一兵卒であり、将軍となるのではなく、生涯兵卒として終わるのが望みであると述べた。<sup>50)</sup> ガッファー・カーンは高潔な王者の風格をもっていたが、自ら常に一兵卒として人々に奉仕することを喜びとしていた。その土台には神への生きた信仰があった。ガンディーの伝えた非暴力をガッファー・カーンはイスラームの伝統の中にも生きていることを自らの生涯を通して証言していた。インドのムスリムの中で特に短気で暴力的という印象を持たれていたパタン人の間に非暴力の実践が社会的な運動として展開したのはガッファー・カーンの生き方が人々に訴えたからである。ガッファー・カーンは敬虔なムスリムとして、イスラームの教えを「貧しいものを助け、飢えているものには食べ物を、服のないものには服を与え、抑圧されているものの味方をし、暴君には抵抗をすること」と一般民衆にもわかりやすい言葉でとらえ、その生涯の目的を預言者ムハン

マドに倣って、人々への奉仕を通して神に奉仕することと明快に表し、何よりも実践によって堅固な裏づけを与えた。

北西辺境州でのクッダイ・キットマッガールとの出会いの旅は、ガンディーに非暴力への確信と、ヒンドゥー教徒とムスリムの融和の実現への希望を新たにさせた。ガンディーは1939年7月には3回目の北西辺境州への訪問を行った。政治的にはコミュニナリズムの深刻化が日々ガンディーを苦しめその解決への糸口は全く見えてこない状況の中で、ガンディーはクッダイ・キットマッガールの集会で自らの真情を訴えて、次のように発言した。ガンディーに対してコミュニナリズムの解決にもっと専念したならば有効な解決が得られるはずではないか、とガンディーを批判する人々がいるが、自分の心の中を見せることができたならば、ヒンドゥー教徒とムスリムの融和を求める祈りと魂の渴望は24時間一瞬たりとも止まることなく続いていることが見せられるであろう。ヒンドゥー教徒とムスリムの融和がなければインドのスワラージは実現しない。それも単なる政治的な取引や妥協の産物ではなく、ヒンドゥー教徒とムスリムの永続的な心と心の融和がいつか必ず来ることを私は確信している。私はヒンドゥー教徒とムスリムの融和を実現するに相応しい道具でなかったかもしれないが、それは神におまかせする。我々は「帯を締めてランプの準備をしておく」ことしかできない。いつ誰を神が選ばれるかわからないからである。どうぞ私の子供の頃からの夢、ヒンドゥー教徒とムスリムが血を分けた兄弟のように生きるという夢が実現するように皆さんも祈って下さい。我々は決して絶望に負けてはいけない。神のなさりようは人間の計り知れないことであるからである。<sup>51)</sup> このように、ガンディーは述べた。

以上のようにガッファー・カーンとガンディーの関わりを検討することを通してガンディーの非暴力の信念、政治と宗教の関わりを理解がガッファー・カーンに共有され、宗教の相違を越えた普遍性を持っていることが明らかにされたであろう。

### パキスタン要求とガンディーの反論

次に、こうした共通の展望をもつに至ったガンディーとガッファー・カーンが分離独立にいたる複雑な歴史的展開の中で、最も厳しい試練に会いながら命がけで非暴力の実践に身を投じ、共に行動したことについて検討したい。その前にまず、ガンディーたちが直面した分離独立を求める思想について非常に荒っぽい形であるがムスリム連盟の指導者ジンナーとガンディーの論議を中心として見ておきたい。

1939年9月にイギリスがドイツに宣戦布告をし、インドも参戦させられ、インドの政治が再び大きく転換した。独立を与えるならば戦争協力をするという会議派運営委員会と戦争協力を必要としているイギリス政府の思惑によって新たな政治交渉が始められた。非暴力の原則に従って戦争協力を反対するガンディーとガッファー・カーンは会議派運営委員会から離脱した。こうした中でジンナーは1940年のムスリム連盟ラホール大会において後にパキスタン宣言と呼ばれた決議を行った。それはムスリムはヒンドゥー教徒とは別の国民(ネーション)であり、

それぞれ別の国家を持たなければ平和に生きていけない、という「二国民論」(Two-Nation Theory)に基づき、インドの西北と東北のムスリム人口の多い地域を分離ムスリムの国家として独立するという主張であった。<sup>52)</sup> この宣言は分離要求を初めて明確にしたものであった。

ガンディーは「分離独立」を求めるラホール決議を深刻に受けとめ、「それはヒन्दゥー・ムスリムの問題のありようを全く変貌させてしまった。私はそれを反真理(untruth)であると呼んでいる」と述べた。<sup>53)</sup> 真理を究極的目的としているガンディーにとって、「反真理」であるという指摘は最も厳しい批判である。ガンディーは「二国民論」に反論して次のように述べた。ムスリムの大部分はもともと改宗者かその子孫でありインドに生まれ育った人々である。改宗することによって別の国民となることはない。例えばベンガルのムスリムはベンガルのヒन्दゥー教徒と言葉、習慣など多くを共有している。一目でインド人であることが分かっても、外見や名字だけではヒन्दゥー教徒かムスリムかすぐには判別できない場合もたびたびある。ムスリムとヒन्दゥー教徒とは別々の国民などではない。「神が一つにされたものは人間は決して分けることはできない。」<sup>54)</sup> ガンディーはムスリムが実際に政治的に決断すべき時には彼ら自身の利益を守るという観点からも、「分離は自殺的行為である」ことから選択することはないであろうと考える、と述べた。<sup>55)</sup>

次に宗教的倫理的な問題として「分離」を考えたとき、ガンディーは「分離を求める主張の底には、イスラームは排他的な同胞意識であり、ヒन्दゥー教徒と相いれないという考えがある」ことを指摘し、こうした立場に立ったムスリム連盟の激しいヒन्दゥー教徒への批判は、「ヒन्दゥー教やヒन्दゥー教徒は全くの悪でヒन्दゥー教徒による支配は罪であり、ヒन्दゥー教徒とムスリムの協力による支配には考慮の余地がなく、ヒन्दゥー教徒とムスリムは抗戦中であり最後の戦闘に向けて準備すべきだ」と呼びかけているものである。しかしこれに対しガンディーは、インドにおいて確かにヒन्दゥー教徒とムスリムが敵対していた時代もあったが、インドの歴史をヒन्दゥー教とイスラームが出会い、相互に学ぼうと試みてきた過程としてとらえる歴史家もおり、その見解が正しいのなら、ヒन्दゥー教徒とムスリムの違いや対立のみを強調するのはむしろ反イスラーム的であると反論する。ガンディーは宗教としてのイスラームについて次のように述べている。「宗教は人間を神と、そして人間同士を結びつけるものである。イスラームはムスリム同士のみを結びつけ、ヒन्दゥー教徒は敵視するものなのか？ 預言者の教えはムスリム同士の平和だけを教え、ヒन्दゥー教徒や非ムスリムに対しては闘うことを教えたのか？ この『毒』としか言えないような教えをインドの8千万人のムスリムに与えていいのか？ ムスリムの心にこの毒を与えている人々はイスラームに対する最大の危害を与えるものである。この考えはイスラームではないことを私は確信している。私はこれまで二十年以上ずっとムスリムと一緒に生活してきたが、一人としてイスラームは反ヒन्दゥー教であると主張してはいない。」従って、「分離」の主張はイスラームに基づいても理解できないことであると反論した。<sup>56)</sup> ガンディーはこのようなイスラームの教えを誤解した「反真理」に対しインドのムスリムに警告することを自分の義務であると受けとめていると述

べた。<sup>57)</sup>

その根拠としてガンディーは次のように自らの立場を明らかにした。インドの分離は、「インドを生体解剖すること (vivisection)」すなわち殺してしまうことであり、自分はそれを阻止するためにあらゆる非暴力的な努力をする、「なぜならば、(分離は)何世紀にもわたる無数のヒンドゥー教徒とムスリムが行なってきた一つの国民として共に生きるための努力を無にすることであり、分離は明白な反真理である。ヒンドゥー教とイスラームは二つの対立する文化と教義をあらわすという考えを私の魂全体は拒否する。このような教えを肯定することは私にとっては神を拒否するに等しい。なぜなら私の魂全体でコーランの神はギターーの神であり、我々はどのような名前であろうと全て同じ神の子供であると信じているからである。ヒンドゥー教徒であった人がイスラームを受容し改宗したからといって別の国民となるという考えは拒否せざるを得ない。」と述べた。<sup>58)</sup>

また、ガンディーはムスリム連盟のメンバーやその新聞によって自分が「イスラームとインド・ムスリムの最大の敵 (arch-enemy)」と呼ばれるようになったことに言及し、自分は彼らの敵となるようなことは一切していないと確信していると述べ、「彼らは私の血を分けた兄弟であり、いくら彼らが私を拒否しても、兄弟であり続けるでしょう。」と述べた。<sup>59)</sup>

1942年8月に会議派はガンディーを指導のもと英国支配に対して即「インドから立ち去れ」(クイット・インディア、Quit India)という決議を行い、新たな民衆的な市民的非服従運動の開始を宣言したが、政府は即座にガンディーを含めて主だった会議派の指導者を一斉に投獄し、会議派は非合法化された。この投獄生活がガンディーの最後の投獄となったが、非常に厳しい試練の時であった。長年の同志であった秘書マハデヴ・デサイの死に続いて妻カストゥルバの死、各地での暴力的事件に対する会議派への責任追及に対する抗議の断食、そして自分自身の大病を経てガンディーは衰弱し、獄内でのガンディーの死を恐れた当局によって1944年5月に釈放された。ガンディーは健康を多少回復すると、最優先問題としてジンナーに話し合いを申し入れ、ボンベイのジンナー邸において1944年の9月に18日間にもわたってほぼ毎日数時間づつ話し合いが重ねられた。ガンディーとジンナーの話し合いによってヒンドゥー・ムスリム問題への突破口が見出されることが期待されたが、話し合いは全くの平行線をたどった。<sup>60)</sup>

ジンナーはインドの諸問題の唯一の解決法はインドをパキスタンとヒンドゥスタン(ヒンドゥー教徒の国)に分割することだけである、とムスリム国家としてのパキスタンの実現を主張した。そこでは理想的な民主主義が行われムスリム以外の少数派の人々も安心して生活できるとジンナーは述べた。<sup>61)</sup> それではムスリムの国家という意味は何か、「ムスリム」とは誰を指すのか。ジンナーは、ムスリムとは「ヒンドゥー教徒とは全く別な国民(ネーション)である。ヒンドゥー教徒とムスリムは文化、文明、言語、文字、芸術、建築、名前、称号、価値観、法律、道徳律、慣習、暦、歴史、伝統、能力、目指すもの、全て、言い換えれば人生、全てにおいて、生き方について、異なる展望をもっている。」という「二国民論」を主張した。<sup>62)</sup> ガ

ンディーはこの立場を受け入れることが全くできなかった。<sup>63)</sup>

ガンディーは一人の求道者としてジンナーに会いに来たが、願いとしては全てのインドの人々を代表することであると述べた。その根拠は宗教や階層やカーストの相違をこえて、全てのインドの人々に共通する苦しみを自分の身に引き受けて生きることがガンディーの悲願だからである。そのためインドの人々の幸せを目指して行動することがガンディーの信念である。<sup>64)</sup> ジンナーはそのガンディーに対し、会議派はヒンドゥー教徒の組織であり、その代表として交渉に臨んでいることをまず認めよと主張していた。一方ジンナーがムスリムを代表しているという自負は、自分がムスリム連盟の議長である、ということに根拠をおいている。<sup>65)</sup> こうしてジンナーとガンディーの話し合いは接点さえ見出すことなく終わった。ジンナーは「二国民論」を根拠としてヒンドゥー教徒の多数者支配から少数者のムスリムが自由になるためには英国支配の権威が分離独立を与えることが必要であり、そのために会議派の同意を得るためにガンディーと会談したのである。ガンディーはヒンドゥー教徒、ムスリムその他は一つの大きな家族であり、分離の是非については独立後に全体の意見を聞くべきであるという姿勢であった。

第二次世界大戦終結後のインドの状況は政治的、社会的、経済的に不安定であった。イギリスは戦勝国となったものの莫大な債務を抱え込み、インドの植民地経営はこれまでのような利益を生み出さず、加えてイギリス国内の政治的状況もインドに独立を与える方向へと変化し、権力の移譲 (Transfer of Power) がにわかに現実のこととなった。そこでのイギリスの最大の関心は、どのように体面を保ちつつインドに独立を与え権力を移譲するかという問題であった。

このような権力の移譲はガンディーが求めていたものではなかった。政治的権力を巡る争いには、インドの最も底辺にいる人々の福祉・幸福という視点は失われていた。英国支配からの脱却によってインドの人々がスワラージへ近づくことをガンディーは悲願としていたが、分離を伴う独立が多くの悲惨を引き起こすことはガンディーには明らかであった。パキスタンの要求は一般民衆からではなく、一握りの政治的指導者たちの権力追求の結果生み出されたものであった。

ジンナーは臨時政府の成立を巡る駆け引きの中で権力移譲が会議派のペースで進むことを恐れ、英国政府と会議派の双方への示威行動を行なうために 1946 年の 8 月 16 日を直接行動の日 (Direct Action Day) とすると宣言した。この宣言によって歯止めが失われ、これまでムスリム連盟はムスリムと非ムスリムを敵対関係として捉えて扇動してきたが、この直接行動の訴えによって、ベンガル州、ビハール州、パンジャブ州、そして北西辺境州でも混乱が発生し、憎悪と不信が際限なく増大し、その勢いは指導者たちの思惑を越えて、彼らが全く予測しなかった規模の狂気となった。この狂気の中で正気に立ち戻ることを訴えてガンディーは最も危険な地域を歩いた。そして他の会議派指導者たちが英国支配とムスリム連盟との交渉に独立の道を見いだすことを期待しているときに、ガッファー・カーンはガンディーと共に行動した。ガンディーとガッファー・カーンにとって、政治的な独立はインドの民衆のスワラージを実現する



ためであり、権力の移譲そのものが目的ではなかった。そしてすでに述べたように、彼らのスワラージ理解において、全ての人々はそのあらゆる相違に越えて同一のものとして愛され包含されるのであり、宗教の相違によって敵視したり切り捨てることはできないのであった。この立場こそ「正気」であり、ガンディーとガッファール・カーンは命がけで巡礼、断食、祈りを行なって人々に正気に立ち返ること(metanoia、メタノイア)を訴えたのである。

### コミュニナリズムの嵐の中で行動を共にする

ジンナーの「直接行動の日」宣言以後続いた、ベンガル州のカルカッタにおける残虐な行為は未曾有の規模であり、カルカッタの市民は恐怖と憎悪と不信感に襲われ、これまで隣人として生活してきた人同士が宗教的コミュニティーの違いによって、互いに対立し、その後共に生きることが不可能である、と考えるようになり、何週間も続く暴動の結果、カルカッタの街にはヒンドゥー地区とムスリム地区の住みわけが進んだ。カルカッタの殺戮はインド全国に大きな衝撃を与えた。ムスリム連盟の指導者たちは彼らの恐れていた「ヒンドゥー支配」や「二国民論」が証明される事態であると宣伝し、会議派やムスリム連盟の指導者たちは一斉に互に非難し責任を追及し合い、不毛な議論を行っていた。<sup>66)</sup>

このカルカッタの大惨事の影響は周囲の農村地帯へと波及した。1946年10月にベンガル州の農村地帯にあるノアカリで深刻なコミュニナリズムな暴動が発生した。ノアカリはムスリム多数(約85%がムスリム)の地域であったが、地主の多くが少数者のヒンドゥーであった。ノアカリでの暴動はヒンドゥー教徒の家や畑が焼かれ、虐殺、略奪、女性が襲われ、物品が収奪された。これまでインドのコミュニナリズムな暴動は主に都市地域で発生してきた。しかし、ノアカリの事態はインドの農村地域にまで攻撃的なコミュニナリズムが影響を及ぼしていることを示し、ガンディーにとってそれは衝撃的なことであった。ガンディーはインドの独立を巡る政治的な交渉よりもインドの魂を救うことを重視するといつてノアカリへ向かった。

ノアカリに行く中継地としてカルカッタに到着したときに、ガンディーはノアカリのムスリムによる残虐行為に憤激した隣のビハール州で、多数を占めるヒンドゥーが、ノアカリのヒンドゥーへの仕打ちの報復行為として少数者のムスリム(人口の約14%)を襲撃していることを知らされ、さらに衝撃を受けた。報復がさらに報復を呼び、ビハールでは約7千人の死者が出る事態となっていた。ムスリム連盟系の新聞は被害を誇張し、十万人以上の死者と報じていた。<sup>67)</sup> ビハール州政府は会議派であったが、インド人内閣の指導者たちは手をこまねいていた。成立して間もない中央臨時内閣のネルーたちはムスリム連盟の指導者とともに直ちにビハールに向かい、事態を沈静化するために「空爆」をも辞さない、と発言した。こうした中でムスリム指導者たちはガンディーに対し、ノアカリのヒンドゥーを助けるのではなく、暴虐を行ったヒンドゥーを戒めムスリムの安全を得るためにビハールへ行くべきだという意見を投げつけた。

ガンディーはカルカッタで11月に「ビハールへ」という訴えを公表した。その内容は、報復することは解決にならない。多勢で少数の人々を殺すのは勇気ではない。自分たちの非人間

的な行いを悔い改め、自分の兄弟としてムスリムを大切に守りなさい。家を失ったムスリムが全て安心して村に帰り家を建て直すのを自分たちの課題としなさい、と訴えた。<sup>68)</sup> ガンディーは当初の計画通り非暴力を掲げてノアカリへ行くが、ビハールの罪をあがなうため自分の食事を可能な限り減らす、という一種の断食を自らに課して、ノアカリの農村を訪ねることにしたことを明らかにした。その背後にある決意は、もしビハールやインドの各地での殺戮が止まないのなら、自分は断食によって死ななければならない、という決意であった。<sup>69)</sup> ガンディーは他の全ての運動を中断してノアカリでの「行動か死か (Do or die)」に自分のもてる全ての力を注ぐ決意であった。

ベンガルで起きた暴動によってビハールだけでなく、インド各地に緊張が高まり強い危機感が広がっていた。ガンディーは日夜自分は何をすべきかを神に祈りつつ、暴動のただ中へ向かった。<sup>70)</sup> ガンディーは一方ではムスリムに寛容すぎると反発を受け、他方ではムスリムの「最大の敵」と見なされて中傷されていた。<sup>71)</sup>

ノアカリへ出発するにあたって、ガンディーはノアカリの苦難と辱めを受けた女性たちの涙をぬぐうために神の奉仕者としてノアカリへ向かうのだと述べた。ノアカリでガンディーがムスリムに殺されることを案ずる周囲の意見に対して、ガンディーは自分の命は神におまかせしているので、自分がどのように用いられるかは、神がお決めになることである、と述べた。<sup>72)</sup> ガンディーはノアカリのヒンドゥーに対して、たとえただ一人であっても、自分の村で兄弟としてムスリムと共に生きる勇気を持つことを訴えた。そしてやむを得ない場合は殺すことなく、自ら死を選ぶことこそ、勇気ある行動であると述べた。

ガンディーはノアカリで再びビハールについて言及し、ビハールは狂気にとりつかれているが、この狂気から解放されなければ人間は平和に生きることはできない。ビハールは人間性を失ったのか。相手より大きな武力によって敵を負かすことによって平和が来ると考えるのは愚かなことである、と訴えた。<sup>73)</sup>

ノアカリに到着した当初はシュリランプールという町を拠点にした。<sup>74)</sup> そしてガンディーは次に自分が何をすべきか、祈り問い続けた。その結果ノアカリの農村地帯をただ一人で村から村へと歩き人々に直接会って訴える、という課題が与えられた。1947年1月からガンディーは N.K. ボースなどごく数人のスタッフと共に、村から村へと歩いて移動する日々を送った。姪のマヌー・ガンディーも途中から加わった。<sup>75)</sup>

ガンディーの日々の歩みは贖罪の巡礼者としてであったので、裸足であった。村に着くとムスリムの家に泊めてくれるように頼み、彼らが与えてくれる食料を食べた。そのようにしてガンディーは時には激しい敵意の中、ほぼ一日一つの村へ行き 48 の村を訪ねた。各村でガンディーは暴動の跡を見て被害者に会い、人々の苦しみの経験について話を聞き、平和を取り戻すための話し合いを開き、寺院や家などを破壊した人々が率先して建材を提供し建物を建て直すこと、また難民となって村を逃げ出した人を迎え入れ安心して暮らせるようにすることを訴えた。そして恐怖の内に逃げ出した人には勇気をもって家へ帰ってくるように呼びかけた。ま

たガンディーは、どれほど根深い罪人であっても心の奥にお互いを思いやる気持ちや慈愛の源を隠してもっていると信じていた。その源をたたい目覚めさせることが必要であり、そのために、命がけてノアカリを歩いたのである。ガンディーがノアカリとビハールを巡った月日は「ムスリムとヒンドゥーの胸に燃えさかった相互への憎悪の破壊的な炎を消し止めるためにガンディーの愛の使命 (mission of Love) の頂点となった時期」であった。<sup>76)</sup>

ガンディーはこの時自分自身を危険にさらして、実際に惨状の中を歩き、人々に会うことによって、それまで不可能と思われた小さな和解を可能にし、不信心と憎悪によって自制心を失っている人々を戒め、考え直す機会を与えた。ガンディーとの出会いによって、一人一人の心が平和の方へ向けられると、確実に状況が変わってくることが実証された。

ガンディーがノアカリへ行っている間にもインドの政治の動向は激しく変化し、ムスリム連盟と会議派の政治的な交渉は暗礁に乗り上げていた。ネルーが行き詰まりの打開策を相談するためにノアカリの農村までガンディーを訪ね、ガンディーにデリーへ戻ることを要請したが、ガンディーはノアカリでの活動を続けることが自分に与えられた任務であると述べた。1947年2月20日にイギリスのアトリー首相は、1948年6月を期限として権力の移譲を行うことを宣言し、最後の総督としてマウントバトンを任命し、インドの独立は目前となった。

ガンディーはノアカリに平和を取り戻すことにある程度成功したが、1947年2月末頃から再燃したムスリム連盟のガンディー批判によって、ガンディーの歩く道に汚物がまかれ、ガンディーの祈りの集会へのムスリムの参加が減少していた。ガンディーはなおノアカリを巡る予定であったが、ビハールのムスリムの状況が依然として改善されていないことを知り、急遽予定を変えてビハール行きを決断した。3月初頭にガンディーは多くの同志をノアカリの村々に残して自分はビハールのパトナへ進んだ。

ビハールではすでにアブドゥル・ガッファー・カーンが北西辺境州から来て、最もひどく破壊された地域の村々を巡り、傷つき恐れに身を震わせているムスリムを励ましていた。自分の家を失い村から逃げたムスリムたちをビハールのムスリム連盟の指導者たちはベンガルへ移民させようとしていたが、その計画は多くの難民の苦難を解消するどころか悪化させていた。ガッファー・カーンは、ムスリム連盟の指導者たちがビハールのムスリムの窮状を政治的に利用していると批判し、むしろムスリムが安心して村に帰ってこられるように手助けすることを訴えていた。<sup>77)</sup>

ガッファー・カーンはビハールの民衆に次のように訴えた。今日のインドはまるで燃えさかる火の中にあり、私たちが自分たちの家に火を放っているのを見て私の心は悲嘆にくれている。今日のインドの上には闇が支配しており、私はどこかに光がないかと懸命に見回すが全く見えない。また、次のようにも述べた。インドはヒンドゥーとムスリムと両方の住む一つの国家である。ヒンドゥーがほんのわずかしかない州もあればムスリムがそうである州もある。ノアカリやビハールで起きたようなことがインドの他の地でも行われたらインドの運命はおしまいである。... 私はムスリム連盟の人々にイスラームは世界で最も寛容な宗教であることを思い

出してほしい。我々が真のムスリムであるならば、我々の同胞たちに寛容性を広めるために最善の努力をすべきである。今日他のコミュニティの方が寛容ではないか。この欠点を直して真のムスリムになろうではないか。このように和解を訴えた。<sup>78)</sup>

ガッファー・カーンは、ガンディーがパトナに到着したときビハールの奥地から送ったガンディーへの手紙の中で、「確かにあなたの言うように、我々の非暴力が今試されています。我々の周囲の政治家たちが神の御名や宗教を、人々の憎悪を広げるために不正に用いているのを見ると、私は政治を憎む気持ちになります。」と述べたが、ガッファー・カーンのようにガンディーと共に勇気を持って行動する指導者は例外的であった。<sup>79)</sup>

実際にガンディーが来てみるとビハールの暴動は一応収まっていたが、和解にはほど遠い状況であった。ガンディーはビハールの状況を詳しく聞いて恥ずかしさに首を垂れた。ネルーの臨時政府は軍隊の力を用いて暴動をとりあえずおさめていたが、和解は、強制や脅威によってではなく、自主的に心からの償いをするによって初めて可能であった。多くのムスリムの被害者たちがガンディーのもとを訪ねて彼らの経験を話した。ビハールの残虐行為の規模はノアカリを上回っていた。ビハールの報復のおかげでベンガルのムスリムの悪行に歯止めがかかりインドは救われたという意見はガンディーを心底悲しませた。通常は穏やかなビハールの人々がなぜこのような狂気に走ったのか。ガンディーはノアカリのヒンドゥーが攻撃されたからといって報復としてビハールのムスリムを血祭りに上げるという考え方は自殺行為であると批判した。そして野蛮な行為に対して報復せず、勇気を持って対応することこそ蛮行に歯止めをかけることであると必死で訴えた。<sup>80)</sup>

ビハールでのガンディーの行動はパトナを根拠地としてガッファー・カーンと共に毎日異なる村へ行って祈りの集会を持ち、またパトナに戻るという形をとった。ガンディーはすでに疲労困憊していてノアカリのように村から村へと進むことはできないと判断したためであった。同時に、ビハールでは集会への参加者があまりにも大勢であったので、混乱を避けるためにはボランティアによる助けが必要であり、当初の考えのように少人数で行くことは不可能であった。<sup>81)</sup> ガンディーは集会で人々に対して心からの祈りは非常に効果的であると述べ、祈ることを勧めた。それも異なる宗教を信じる人々がそれぞれの祈り方で、共に一つの集会に集うことを望んだ。<sup>82)</sup> そのことを象徴するように、ガンディーの祈りの集会ではこれまでアシュラムで続けてきたように、ヒンドゥー教の祈りだけでなく、イスラームのコーランの朗誦やキリスト教の賛美歌などの様々な宗教の祈り、賛美歌が含まれていた。

ガンディーはビハールの村で家屋や寺院が破壊された跡を見て心が痛み、復讐をやめ、相互に赦し合うことを訴えた。復讐は復讐を呼び、インドは破滅してしまう。パキスタン要求にあるようなインドから分離して自由を得たいという考えは、結局のところ自分の村だけの自由を要求するような考え方であり、これは間違っている。我々は全てインド人であり、一人のインド人によってインドのどこかでなされた罪は全てのインド人にとって関わりのあることである。私はインド全体が自由になるまでは「行動か死か」という私の誓いに忠実であるつもりである、

とガンディーは述べた。<sup>83)</sup>

ガンディーは共に行動をしているガッファール・カーンに言及し、彼は非暴力こそパタン人の民衆の自由を得る唯一の道であることを信じて実行し、復讐には復讐を返すことが慣習となっていたパタン人の多くを愛によって説得した。我々が互いに争い続けていたら、我々は奴隷であり続けることになる。我々はガッファール・カーンのような勇者の非暴力をまねるべきである、とその勇気を称賛した。<sup>84)</sup>

時にはガンディーの依頼でガッファール・カーンが集会で話した。ガッファール・カーンは、インドは火事で燃えているが、もしインドが焼け落ちたなら、ヒンドゥー、ムスリム、シーク教徒、キリスト教徒など全ての人々が敗者となる、と訴えた。イギリスが立ち去ることを表明したことによって、我々の責任は一層重くなった。パキスタンの成立を望む人々も、憎悪や暴力によってではなく、説得と愛をとおしてパキスタンの実現は初めて可能ではないか。人々はインド全体のことを考えて火を消すべきではないか。このように訴えた。<sup>85)</sup>

しかし宗教的対立の緊張はインド各地で広がっていた。ムスリム連盟は激しく会議派を批判し続けてパキスタンを要求し、パンジャブ、デリー、そして北西辺境州でも不穏な空気が広がっていた。北西辺境州では会議派のカーン・サヒーブ博士の州内閣に対しムスリム連盟は「市民的非服従運動」を展開すると宣言し、それを契機にして圧倒的多数のムスリムによるヒンドゥー教徒やシーク教徒の襲撃が始まった。ガッファール・カーンはビハールにいて不在であったがクッダイ・キットマッガールは非暴力の誓いを守り、ヒンドゥー教徒とシーク教徒の生命と財産を守るために命がけで行動した。<sup>86)</sup> 一方パンジャブ州では州内閣が機能しなくなり、軍隊の制圧によってようやく平穏となった。こうした諸状況から3月の初めに会議派指導者たちはパキスタンを受容する条件として、ムスリム多数の州であるが約40%の非ムスリム人口を持つパンジャブ州の分割を要求すると決議した。ガンディーはこの決議について事前に何ら相談を受けてなかった。新聞で読んで知ったガンディーは激しい衝撃を受けネルーに手紙を書いて問い合わせなければならなかった。ネルーはジンナーのパキスタン要求への唯一の解決法はパンジャブの分離であると会議派運営委員会のメンバーのほぼ全員が同意したと伝えた。<sup>87)</sup>

1947年3月22日に到着した新しい総督マウントバトンの要請によってガンディーはガッファール・カーンと共に、一時的にビハールを離れ、デリーで会談に臨んだ。マウントバトンはインドの指導者たちと会談し、インドが内乱状態になる前に、迅速な行動によってインドの権力移譲を完了させることを至上命令としていた。ガンディーがマウントバトンとの会談で提案したことは、ジンナーを首班としてムスリム連盟に政権を与え自由以内閣を指名する権利を与えることによってインド全体をパキスタンとするということであった。しかしガンディーの提案はネルーなどの会議派の運営委員会のメンバーたちに拒否され、ガンディーは提案を取り下げなければならなかった。ガンディーは分離独立によって平和が来ると考えることは間違いであり、パキスタンを実現するかどうかは独立後に決定するべきであると主張しつづけた。<sup>88)</sup> その後いったんガンディーはビハールへ戻った。ガンディーは会議派がパキスタンの分割を拒

否しインドの統一を主張し続けることを訴えたが、もはやガンディーの意見は尊重されなかった。<sup>89)</sup> ガンディーは最後の望みを託してジンナーと直接会談したが、ジンナーの姿勢は分離の是非については論議の余地が無いというものであった。<sup>90)</sup> そして1947年5月の初め、国民会議派運営委員会はインドとパキスタンの分離に合意することを決定した。ただし、パンジャブ州とベンガル州はそれぞれ州議会の承認を得て分割されることとなった。<sup>91)</sup> 一貫して会議派を支持してきた北西辺境州では改めて住民投票を行ってパキスタンとインドのいずれかに帰属することを決めることになったが、これはガッファー・カーンたちの見解では人々の間の対立と分裂を一層の悪化し、さらなる流血の事態を招くという北西辺境州の会議派州議会の意向を全く無視していた。北西辺境州の地理的状況から、パキスタンかインドかの選択ではなく、今となってはパキスタンかパクトゥーニスタン(パタン人の国)の選択でなければ意味がないと思われるということも会議派運営委員会に明言してあったので、ネルーたちがこのような決断に至ったことはガッファー・カーンにとって大きな衝撃であった。<sup>92)</sup> しかし6月3日にパキスタンの分離独立を認める正式な宣言が英国政府によって発表され、それと同時に独立の予定日が同年8月15日に繰り上げられた。会議派の指導者たちは分離に合意することによってインドが平和を得られることを期待していた。<sup>93)</sup>

インドの分離独立の決定はガンディーにとって大きな衝撃であった。ガンディーは孤独であった。<sup>94)</sup> パキスタンの「二国民論」はガンディーの悲願であった家族としてのインドの一体性、自由・スワラージの否定であった。ガンディーはそれを受け入れるという会議派運営委員会を説得することができなかった。会議派の指導者たちはもはやガンディーと共にインドの自由・スワラージを求めて闘わず、政治的権力の移譲を受け、国家として独立することを目標としていた。ガンディーは今後のインドのために、会議派を分裂させることは避けたいと考えていた。たとえ、会議派運営委員会の決定にガンディーがこれ以上反対しても、インドの民衆がガンディーの非暴力にもとづいた運動に従うことは期待できなかった。しかし、ガンディーは分離のもたらす悲惨を予見していた。

## 最後に：二人の別れ

インドの独立運動の大きな流れの中でネルーを始めとした会議派の指導者たちはガッファー・カーンとクッダイ・キットマッガールの信頼を全面的に裏切る結果となった。ガンディーやガッファー・カーンの反対を押し切って、ムスリム多数の地域のベンガル州とパンジャブ州は分割され、北西辺境州はパキスタンの一部となった。<sup>95)</sup> 分離に伴って引き起こされた多くの悲劇(宗教的暴動、難民、殺戮、略奪、強制改宗、婦女暴行など)とその後の対立は今日まで両国の関係に決定的な不信感と憎悪を残し続けている。<sup>96)</sup>

独立後もガッファー・カーンとパタン人にとっては長く厳しい闘いの連続であった。ガッファー・カーンは英国統治下で15年間投獄生活を送ったが、パキスタン政権のもとでパタン人の自治と公正な扱いを求めて活動を続けたためさらに15年間も投獄され、兄のカーン・サ

ヒーブは1958年に暗殺されたことから、その闘いが苦難に満ちたものであったことが明らかであろう。

インドとパキスタンの分離独立が決定的となり、1947年7月30日にガッファール・カーンとガンディーがデリーの鉄道の駅で互いに別れるときに、ガンディーはガッファール・カーンに、あなたの使命はパキスタンを真に清らかな国(パクという言葉は清浄という意味)にすることで、と述べた。そしてガッファール・カーンはガンディーが去った後ガンディーについて次のように述べた。「ガンディーは我々に真理の道を指し示してくれた。我々がもうこの世にいなくなつてから、将来の世代は、ヒンドゥーはガンディーのことをクリシュナのような神の化身だと思つてであろうし、ムスリムは彼を神の送った使徒であるというであろうし、キリスト者は彼をもう一人の平和の子であると呼ぶであろう。そのときこそインドは誇りに輝くであろう。ガンディーが長生きをして我々が最後まで真理と正義のために闘い続けることができるように力を与え励まし続けてくれるように神に祈ります。」そして「どうぞ我々のために祈つて下さい。これから長く恐ろしく厳しい闘いになることでしょう。」と述べて北西辺境州へと帰途についた。この時が二人の最後の別れであった。<sup>96)</sup>

ガンディーは1948年1月30日にデリーで祈りの集会場へ行く途中で熱狂的ヒンドゥー教徒に暗殺された。<sup>97)</sup> その時暗殺者に合掌しつつ「へー、ラーマ(おお、神よ)」とつぶやいて倒れた。即死であった。<sup>98)</sup>

#### 注

- 1) この問題は、国際基督教大学大学院比較文化研究科へ1998年4月に提出した拙論、博士論文「マハートマ・ガンディーとコミュニカル・ユニティー」(徳田彩子)で論じている中心的テーマである。
- 2) M. K. Gandhi, *Autobiography, or My Experiments with Truth* (Originally published in 2 volumes, in 1927 and 1929 from Navajivan; Penguin Edition, 1982) “Introduction” pp. 13–17; Part V, “Farewell”, pp. 452–4. 真理・サッティヤの追究はガンディーの生涯の究極的な目的であり、これを自叙伝の「はしがき」において言い換えて自己実現、神にまみえること、自由(モクシャ)であることを明らかにしている。ガンディーの生涯は「意味の追究」によって方向付けられたたえざる前進であり、こうしたガンディーの現実理解の枠組みが徹底した非暴力の生き方の源泉であることが理解される。葛西實「M. K. ガンディーと南アフリカ」『アジア文化研究』22号(国際基督教大学アジア文化研究所、1996年) pp. 193–207.
- 3) サッティヤグラハ(satyagraha)は真理を堅持する、という意味であるが、南アフリカにおけるインド人の人権闘争の過程で政府によるインド人の尊厳を奪うような不当な登録法に対して、あくまでも抵抗するが、非暴力に徹するという運動が生まれ、ガンディーはその精神を表す新しい言葉を公募して決定した。ガンディーは南アフリカでの経験を通してサッティヤグラハを政治的運動には限定せず、真理を求めて非暴力を実践する生き方そのものから生み出される「魂の力」(soul-force)をガンディーはこの言葉によって表し、日常生活における非暴力の実践全般をサッティヤグラハの実験と呼んでいた。
- 4) M. K. Gandhi, *Autobiography*, Part V, Ch. 26 “Passion for Uniy”, p. 398.
- 5) ガンディーとキラールファット運動の関わりについては国際基督教大学大学院比較文化研究科へ1989年に提出した拙論「ガンディーとキラールファット運動」で検討した。その要旨は『ICU比較文化』18号(ICU比較文化研究会、1990年3月)で発表している。
- 6) S. Abid Husain, *Gandhiji and Communal Unity* (Bombay: Orient Longmans 1969) pp. 74–77.
- 7) 独立後のインドを代表する歴史学者の一人、ピパン・チャンドラは、コミュニナリズムを南アジアの

不可避的な運命にとらえるのではなく、植民地支配下のインドにおいて政治的あるいは経済的な目的をもって広められたことを指摘している。そして今日でもコミュニナリズムのイデオロギーがインドの人々のものの考え方に無意識のうちに入り込んでいることを自覚し、それに対処することを提起している。例えば Bipan Chandra *The Epic Struggle* (Hyderabad: Orient Longman Ltd., 1992) “An Assault on Communalism” pp. 45–65 を参照のこと。

- 8) 全インドムスリム連盟 All India Muslim League は 1906 年に英国支配の後押しを受けて設立された。当初は非常に限られたムスリム・エリートの組織であったが、M. A. ジンナーの指導の下、次第にコミュニナリズムの立場を強化し、1947 年に南アジアの分離独立を実現する最も強力な推進力を獲得するに至るまで大きく変化していった。本論ではムスリム連盟と省略して表記する。
- 9) ガッファール・カーンの生涯については、自叙伝; Badsha Khan (Abdul Ghaffar Khan), *My Life and Struggle, Autobiography of Badsha Khan* (Narrated by K. B. Naran) (Delhi, Hind Pocket Books, 1969) の他、主な資料として D. G. Tendulkar, *Abdul Ghaffar Khan: Faith is a Battle* (Bombay: Gandhi Peace Foundation, Popular Prakashan, 1967), Pyarelal, *Thrown to the Wolves: Abdul Ghaffar* (Calcutta: Eastlight Book House, 1966) がある。また、こうした資料を踏まえた非常に読みやすい伝記としては、Eknath Easwaran, *A Man to Match His Mountains: Badshah Khan, Nonviolent Soldier of Islam* (Petaluma, California, Nilgiri Press, 1984)。
- 10) Badsha Khan (Abdul Ghaffar Khan), *My Life and Struggle, Autobiography of Badsha Khan* (Narrated by K. B. Naran) (Delhi, Hindi Pocket Books, 1969), pp. 13–4.
- 11) *Ibid.*, pp. 28–9.
- 12) *Ibid.*, p. 23.
- 13) Eknath Easwaran. *A Man to Match His Mountains: Badshah Khan, Nonviolent Soldier of Islam*, pp. 68–71. ガッファール・カーンのこの生き方はガンディーが自らの生涯をただひたすら真理追求であることと共通している。信仰に根づいた真の宗教者の歩みとしてイースワランはガンディーの他にアシジの聖フランシスとの類似性も指摘している。
- 14) “I have one great dream, one great longing. I want to see all the Pathan tribes, from Baluchistan to Chitral, united into one brotherhood. I want to see them share each other’s sorrow and happiness, I want to see them work together as equal partners. I want to see them play their national role and take their rightful place among the nations of the world, for the service of God and humanity.” Badsha Khan *op. cit.*, p. 122.
- 15) *Ibid.*, pp. 124–5.
- 16) *Ibid.*, p. 66.
- 17) ガンディーの秘書として生涯を捧げたマハデヴ・デサイはガンディーに依頼されてガッファール・カーンとの対話を行ってその最初の伝記を書いた。その題はガンディーとの接点を強調し『神の二人の奉仕者』である (*Two Servants of God*, by Mahadev Desai, Delhi: Hindustan times Press, 1935)。残念ながらこの著作をみることはできなかったが、他の著作がそれを踏まえて書かれている。牢獄での苦しみを通して多くを学んだことについてガッファール・カーン自身が述べていることをデサイの本からの引用で (p. 23), Eknath Easwaran, *op. cit.*, p. 87. ガンディーも南アフリカでの牢獄生活を通して自己抑制や簡素な生活など多くを教えられたと述べている。
- 18) D. G. Tendulkar, *Abdul Ghaffar Khan: Faith is a Battle*, p. 44.
- 19) *Ibid.*, p. 48.
- 20) *Ibid.*, pp. 48–9.
- 21) Badsha Khan *op. cit.*, pp. 89–89. ガンディーも南アフリカにおいて週刊誌『インディアン・オピニオン』(英語、グジャラーティ語)をサッティヤグラハ運動への理解を広め運動を推進するために発行していたのに始まり、インドに帰国してからは『ヤング・インディア』(英語)、『ナヴァジヴァン』(グジャラーティ語)、『ハリジャン』(英語とグジャラーティ語)など常に文章を通しての啓蒙活動を行っていた。また、当時のインドの知識人が英語を公用語としていることにガンディーは批判的であり、母国語の使用、お互いの言語の習得を民族運動の課題として提起していた。
- 22) Badsha Khan *op. cit.*, pp. 96–97.
- 23) 南アフリカでガンディーがサッティヤグラハ運動を開始したときも、同じように誓いを原点とした自発的な運動として展開したのである。M. K. Gandhi, *Satyagraha in South Africa* (Ahemdabad: Navaji-



- van, 1928) Ch. XII “The Advent of Satyagraha” pp. 95–102 にその誕生の経過が詳しく書かれている。
- 24) ただしガッファール・カーンは会議派からの金銭的な支援に対しては一貫して断っていた。金銭を受けることによって生み出される不要な不信感を回避するためであった。あくまでもクッダイ・キットマッガールは自給自足を原則としていた。ガッファール・カーンによると、ムスリムが預言者の教えを忘れてしまう最大の原因は金銭へのどん欲と、権力への欲望であるからである。Badsha Khan, *op. cit.*, p. 239.
  - 25) D. G. Tendulkar, *op. cit.*, p. 57.
  - 26) 第一回円卓会議は1930年末から1931年1月にかけて会議派を無視して開かれたが、そこでは藩王国の王侯などの保守的な指導者たち、穏健派指導者たち、ムスリム指導者たちではモハメッド・アリーや、M.A. ジンナーなどが参加してインドの新しい統治制度について論議されるはずであったが、ムスリムとヒンドゥー教徒とシーク教徒の対立が強調され、結局インドの自治に関しては成果はなかった。この失敗を踏まえて英国支配は会議派との交渉に踏み切ったのである。
  - 27) D. G. Tendulkar, *op. cit.*, pp. 85–6.
  - 28) *Ibid.*, p. 87.
  - 29) *Ibid.*, pp. 94–5.
  - 30) *Ibid.*, p. 93.
  - 31) Jawaharlal Nehru (1889–1964) インド独立運動の若き指導者として1929年にやはり偉大な政治家であった父モティラル・ネルーの後を引き継いで会議派の議長に就任し、インドの完全独立を要求した。ガンディーと非常に親密な関わりを持ち、献身的に国に奉仕したが、思想的には社会主義に傾倒し、ガンディーとは異なる道を歩んだ。独立後初代首相を務めアジアの国々の指導者として大いに尊敬された。
  - 32) D. G. Tendulkar, *op. cit.*, p. 109.
  - 33) アフガニスタンは歴史的にパタン人の住む領域であり、インドのパタン人は自分たちのことを「アフガン」と呼ぶなど、アフガニスタンと同胞意識は歴史的に強かった。英国支配はアフガニスタンを隣のソビエト・ロシアとの緩衝地帯としてとらえていた。北西辺境州はロシアがアフガニスタンを通してインドへ侵略することを防衛する役割を想定されていた。また、クッダイ・キットマッガールの制服の色から「赤シャツ隊」と呼ばれていたこともソビエト・ロシアの共産主義との関わりを疑うのに用いられた。
  - 34) アシュラムでのガッファール・カーンとガンディーについては特に D. G. Tendulkar, *op. cit.*, “A Gift from God”, pp. 164–177 に詳しい。
  - 35) *Ibid.*, p. 171、ガンディーのミラベンへの1934年9月24日の手紙から。
  - 36) *Ibid.*, p. 175.
  - 37) Eknath Easwaran, *op. cit.*, “preface”, p. 11, p. 143.
  - 38) D. G. Tendulkar, *op. cit.*, pp. 172–3.
  - 39) Judith M. Brown, *Gandhi, Prisoner of Hope* (New Haven: Yale University Press, 1989) pp. 275–6.
  - 40) 1925年に糸紡ぎ車(チャルカ)による手紡ぎ糸とそれを用いた手織布(カッディー)の普及を目的として All India Spinners’ Association (AISA) が設立されているが、それをさらに広め、全インド村落手工業会 (AIVA) の設立はインド村の自給自足、経済的自立への実験を目的としていた。ガンディーは会議派の全メンバーに会費としてお金ではなくそれぞれが自分で糸を紡いで納めるなどの提案を行ったが、会議派内では十分に理解を得られなかった。*Ibid.*, pp. 298–9.
  - 41) D. G. Tendulkar, *op. cit.*, pp. 178–9.
  - 42) *Ibid.*, pp. 182–3.
  - 43) *Ibid.*, p. 197.
  - 44) 新しい統治法によって有権者数は3千500万人となり、成人人口のほぼ4分の1となった。
  - 45) この丁度10年後にはムスリム連盟はムスリムの国として「パキスタン」の実現を可能にしたが、どのようにして政治的権力を拡大したのかという問題を選挙の問題から詳細に研究している著作として I. Talbot, *Provincial Politics and the Pakistan Movement: The Growth of the Muslim League in North-West and North East India 1937–1947* (Karachi: Oxford University Press, 1988) があげられる。
  - 46) D. G. Tendulkar, *op. cit.*, p. 222.

- 47) Pyarelal, *A Pilgrimage for Peace* (Ahmedabad: Navajivan Press, 1950).
- 48) D. G. Tendulkar, *op. cit.*, p. 233. ガンディーはインド各地を訪問していたがそうした場合通常インドの民衆が集まったときの騒々しさや押し合いへし合いの大混乱の状況に辟易するほどであったので、なおさらクッダイ・キットマッガールの規律正しさに驚き感動したのである。
- 49) *Ibid.*, “Gandhi’s First Visit”, pp. 234–40, “Second Visit” pp. 241–58 から以下のスピーチの要旨をまとめた。
- 50) Jayant Pandya, *Gandhi and his Disciples* (New Delhi: National Book Trust, 1994) p. 115.
- 51) D. G. Tendulkar, *op. cit.*, pp. 290–1.
- 52) パキスタンは1930年にM. イクバルがムスリム連盟の大会で西北インドにムスリムの自治州をつくることを提起し、1933年にムスリムの学生たちが考えたのが「パキスタン」という名前であった。その提案をジンナーは当初全く目向けなかった。1940年のラホール決議では、西だけでなく、ベンガル、アッサムを東半分と考えていたようであるが、明確な定義はされていない。「パキスタン宣言」の本文はG. Allana (ed.) *Pakistan Movement: Historic Documents* (Islamic Book Service, 1977) pp. 226–7, “Resolution adopted by the All-India Muslim League at Lahore in its twenty-seventh annual session on 23rd March, 1940, commonly known as the ‘Pakistan Resolution’”. 及びこの決議に関するジンナーの議長演説 *Ibid.*, pp. 228–45, “Presidential address delivered by the Quaid-e-Azam at the Lahore Session of the Muslim in Lahore in March 1940, when the historic ‘Pakistan Resolution’ was adopted as the goal of the Muslims of India.
- 53) *Collected Works of Mahatma Gandhi* (マハトマ・ガンディー全集、以下 *CWMG*) (New Delhi: Publications Division of the Government of India, Navajivan, 1958–1994) Vol. 72, “Hindu-Muslim Tangle” (*Harijan*, May 4, 1940) p. 27.
- 54) *CWMG* Vol. 71, “A Baffling Situation” (*Harijan*, April 6, 1940) pp. 388–9.
- 55) *CWMG* Vol. 71, “A Baffling Situation” (*Harijan*, April 6, 1940) p. 388.
- 56) *CWMG* Vol. 72, “Hindu-Muslim Tangle” (*Harijan*, May 4, 1940) pp. 27–8.
- 57) *CWMG* Vol. 71, “A Baffling Situation” (*Harijan*, April 6, 1940) p. 390.
- 58) *CWMG* Vol. 71, “My Position” (*Harijan*, April 13, 1940) pp. 412–30. ガンディーはこの記事を次のように書いて結んでいる。“I claim to represent all the cultures, for my religion, whatever it may be called, demands the fulfilment of all cultures. I am at home wherever I go, for I regard all religions with the same respect as my own.” このガンディーの立場は非常に理解することが困難であるが、ガンディーの宗教理解の鍵である。
- 59) *CWMG* Vol. 72, “Hindu-Muslim” (*Harijan*, June 6, 1940) pp. 132–3.
- 60) ガンディーとジンナーはこの会談について文書を取り交わし最終的に相互に確認の上公表した。このやりとりが *CWMG* Vol. 78 に掲載されている。ガンディーとジンナーはボンベイのジンナーの邸宅で1944年9月9日から27日に会談の失敗が公表されるまで話し合った。
- 61) *CWMG* Vol. 78, Appendix IV “Letter from M. A. Jinnah” (Sept. 11, 1944) p. 403.
- 62) *CWMG* Vol. 78, Appendix VI “Letter from M. A. Jinnah” (Sept. 17, 1944) pp. 406–7.
- 63) *CWMG* Vol. 78, “Letter to M. A. Jinnah” (Sept. 22, 1944) pp. 122–3.
- 64) *CWMG* Vol. 78, “Letter to M. A. Jinnah” (Sept. 15, 1944) p. 103. ガンディーの生き方を通して明らかにされていることであるが、ガンディーは自分自身を伝統的なヒンドゥー教徒であるとしながら、次のように述べている。「私は自分を伝統的なヒンドゥー教徒であると言うが、それはつまり、私はムスリムであり、シーク教徒であり、パールシー教徒であり、キリスト教徒である、ということである。」 *CWMG* Vol. 88, p. 175 (Sept. 12, 1947) このような一見矛盾に満ちた発言はジンナーにはとうてい受け入れられないものであった。 *CWMG* Vol. 78, Appendix VI “Letter from M. A. Jinnah” (Sept. 17, 1944) pp. 408.
- 65) *CWMG* Vol. 78, Appendix III “Letter from M. A. Jinnah” (Sept. 10, 1944) p. 401; *ibid.*, Appendix XI “Letter from M. A. Jinnah” (Sept. 26, 1944) pp. 417.
- 66) D. Dalton, *Mahatma Gandhi, Nonviolent Power in Action*, (Columbia U. Press, 1993) p. 147.
- 67) N. K. Bose, *My Days with Gandhi* (London: Sangam Books, 1974) p. 35.
- 68) *CWMG* Vol. 86, “To Bihar” (Sodepur, Nov. 6, 1946) (*Harijan*, Nov, 10, 1946), pp. 81–2.

- 69) CWMG Vol. 86, “Letter to Jawaharlal Nehru” (Nov. 5, 1946) pp. 78–9.
- 70) ガンディーはノアカリへ来た当初はひどく心が乱されていたが、ガンディーの世話をしていた N. K. ボースは、ガンディーが自分自身に向かって「どうしたらいいのか、どうしたらいいのか。」と何度もつぶやいているのを聞いたという。N. K. Bose, *op. cit.*, p. 63.
- 71) 10月30日にカルカッタでガンディーは乗っていた自動車に鉄片を投げつけられたが、幸いけが人は出なかった。
- 72) CWMG Vol. 86, “Speech at Kudhtia” (Nov. 6, 1946) (*The Bombay Chronicle*, Nov. 7, 1946) p. 85.
- 73) N. K. Bose, *op. cit.*, p. 40. ガンディーはさらに軍備が平和をもたらさないことについて、「あれだけの軍備を持っているヨーロッパの例を見よ。国と国が兄弟同士のように平和に生きることを学ばなければ世界の平和もあり得ない」と述べた。
- 74) ノアカリでのガンディーはまず身近な同志たちに村に一人あるいはベンガル語の通訳と共に二人づつ送り、そこでそれぞれが何ら身を守るものもない中で勇気を持って生きることによって、人々に勇気を取り戻させることを願っていた。ガンディー自身はシュリランプールで主に通訳のための N. K. ボースと速記を行う書記の2人のみと生活し、シュリランプールの人々との話し合いを断続させた。
- 75) マヌバヘン・ガンディー(マヌー)はガンディーのいとこの孫娘であり、当時18歳であった。ガンディーの最晩年に日常生活を支え、ノアカリの巡礼について *The Lonely Pilgrim* (Ahmedabad: Navajivan, 1964) を記している。マヌーにとって、日々が非暴力の実践の学びの時であり、詳しく日記を付けていた。独立後のカルカッタの断食については *The Miracle of Calcutta* (Ahmedabad: Navajivan 1959) を書いた。その他にもマヌーにとって母親同然であったカストゥルバの最期についてなど回想をまとめている。マヌーはガンディー暗殺の時にガンディーと共にいた一人であった。
- 76) S. Abid Husain, *Gandhiji and Communal Unity*, p. 105. この巡礼においてガンディーの愛唱歌は、ラビンドラナート・タゴールの「ただ一人歩め」というベンガル語の歌であった。ガンディーは祈りの集会で、また歩きながらこの歌を繰り返し歌った。“If they answer not to thy call, Walk alone” という詩であった。Manubahen Gandhi, *Bapu — My Mother* (Ahmedabad: Navajivan, 1949), p. 37.
- 77) D. G. Tendulkar, *op. cit.*, p. 406.
- 78) *Ibid.*, p. 403.
- 79) *Ibid.*, p. 404.
- 80) N. K. Bose, *op. cit.*, p. 140.
- 81) *Ibid.*, pp. 144–5. パトナの集会ではラウドスピーカーなども必要で、ガンディーは壇上に座って話をした。集会の最後には被害者のための献金が集められた。
- 82) CWMG Vol. 87, “Speech at Prayer Meeting” (at Patna, March 5, 1947) p. 43.
- 83) CWMG Vol. 87, “Speech at Prayer Meeting” (at Patna, March 13, 1947) pp. 77–8.
- 84) CWMG Vol. 87, “Speech at Prayer Meeting” (at Patna, March 12, 1947) pp. 74–5.
- 85) D. G. Tendulkar, *op. cit.*, p. 404.
- 86) *Ibid.*, p. 406. 北西の辺境州の都市ベジャワールでは1万人のクッダイ・キッドマツガールが非ムスリム人口を守った。*Ibid.*, p. 407.
- 87) Pyarelal, *Mahatma Gandhi, The Last Phase* Vol. 2 (Navajiva, 1958), pp. 34–5.
- 88) D. G. Tendulkar, *op. cit.*, p. 411.
- 89) ガンディーは会議派のある同志から、会議派運営委員会がガンディーの信念を共有せず、理性によってパキスタンに合意するのではなく、徹底的にパキスタンに反対するでもなく、暴力に屈服してインドの分割に合意しようとしていることに対してなぜ反対運動をしないのか、と問われて、「今日の私の意見に耳を傾ける人はいません。」と答えた。これに対し「指導者は聞かなくても民衆はあなたを支持するでしょう。」と同志が聞くと、「民衆も支持しないでしょう。私はヒマラヤ山脈へ隠遁しろと言われていました。人々は私の写真や銅像に花輪をかけたがりますが、誰も私の忠告に従おうとはしません。」と述べた。同志が「民衆は今日あなたの忠告に従わなくても、いずれ近い内に従わなければならなくなるでしょう。」と反論するとガンディーは「例えそうだとでもそれがなんになるでしょう。その頃には私は生きていないかも知れません。問題は今私たちが何をすべきかです。自由のための闘いの間は私たちは団結していたけれども、独立を目の前にして私たちはすっかり分裂しています。権力の期待が私たちの志を失わせたのです。」と答えた。(May 29, 1947), Pyarelal, *op. cit.*, p. 209.

- 90) D. G. Tendulkar, *op. cit.*, pp. 415–6.
- 91) ムスリム連盟はパンジャブとベンガル州の分割を望んでいなかったが、平和のために妥協案として受け入れると宣言した。ネルーはインドの生体解剖を誰もが嫌悪しているが、インドの流血が続くまま放置できない。現状では外科手術が必要である、と述べた。 *Ibid.*, p. 425.
- 92) 北西辺境州がムスリム連盟の支配の下でパキスタンの一部となることをネルーたちが受容したと知ったとき、ガッファー・カーンは「あなたがたは我々パタン人を狼の前に投げ出した。」と述べた。Badsha Khan *op. cit.*, p. 204. この言葉を踏まえて独立後約 20 年後に当時アフガニスタンに亡命中であったガッファー・カーンに会って独立後のパタン人の苦難に満ちた闘いを知り、改めてガッファー・カーンの伝記を書いたピヤレラルはその題を『狼の前に投げ出されて』とつけた。Pyarelal, *Thrown to the Wolves, Abdul Ghaffar*, (Calcutta: Eastlight Book House, 1966).
- 93) D. G. Tendulkar, *op. cit.*, pp. 424–5. パキスタンの分離について、ネルーは「あまりの頭痛のひどさに頭を切り落としたようなものだ」と表現した。“By cutting off the head we will get rid of the headache.” *Ibid.*, p. 425.
- 94) CWMG Vol. 88, “Talk with Manu Gandhi” (June 1, 1947) pp. 50–51. 「私はすでに死んでいるのかもしれないが、もし私の予測する悪がインドを覆い将来インドの独立が危険にさらされたなら、どうか後世の人々にどれほどこの老人がそのことを考えて苦しんだか知らせてほしい。次代の人々がガンディーがインドの生体解剖に荷担したとって非難しないようにしてほしい。しかし今日人々は皆独立のために忍耐を失っている。そのため選択の余地が無くなっている。」 *Ibid.*, p. 52.
- 95) 北西辺境州は 1946 年の選挙においてもカーン・サヒーブ博士を首班として会議派州内閣が成立していたが、ムスリムが人口の 90% を超え、地理的にもパキスタンの重要な位置にあったため、1946 年からムスリム連盟は、特に北西辺境州において勢力拡大を目的とした激しい政治運動を展開してきた。会議派運営委員会がパキスタンの分離を認めたときに北西辺境州は事実上選択の余地を与えられず、パキスタンに帰属することとなり、ガッファー・カーンたちは最も困難な状況に追い込まれた。住民投票を行う決定に関してもパタン人の意志を反映したものではなく、ガッファー・カーンとガンディーは反対したが受け入れられなかった。住民投票において、パキスタンかインドかではなく、パキスタンかパクトゥニスターン(パタン人の国)か、なら投票する意味がある、というガッファー・カーンの訴えは、インドの分割を最低限に(すなわち二国に)限定させようとしていたマウントバトンや会議派指導者に支持されず、クッダイ・キットマッガールは住民投票自体をボイコットした。その結果パキスタンとなった。ガンディーはガッファー・カーンたちの悲しみを思い、彼らが抑圧された場合必ずインドは助けを行うと約束した。しかし、ガンディーは暗殺され、インドの指導者たちはパタン人の人々の苦難に手助けすることができなかった。クッダイ・キットマッガールはパキスタン政権下で弾圧され、何千人もの死者を出した。ガッファー・カーンは 1988 年に亡くなるまでパタン人の同胞の自由を求めて闘い続けた。そして最後まで非暴力への信念を捨てなかった。
- 96) 分離独立が一般の人々にどれほどの深刻な苦しみをもたらしたかを理解することは困難であるが、ひとつの手がかりとして南アジアに特有な文学領域として「動乱文学」というものがあり、翻訳も出されていることを指摘しておきたい。今日にいたる人々の心の傷の深さについては、最近の研究書の Urvashi Butalia, *The Other Side of Silence — Voices from the Partition of India* (Hurst & Co., 2000) などを参考にさせていただきたい。
- 97) Pyarelal, *Mahatma Gandhi, The Last Phase*, Vol. 2, (Ahmedabad: Navajivan, 1958) p. 282.
- 98) 暗殺者のゴードセーの法廷における発言は暗殺の理由を明確にしているが、それは「ガンディーの主張する非暴力は近代国家としてのインドの独立と発展に大きな障害」となりインドの「破滅をもたらす」からであった。葛西實「M・K・ガンディーの近代文明批判——A・ナンディーの見解」『アジア文化研究』別冊 7 号(国際基督教大学アジア文化研究所、1996) p. 125–7.
- 99) 1948 年 1 月のデリーでの断食の後ガンディーは死を覚悟していたかのようなのである。ガンディーは自分が殺されるときに神の御名を口にし怒りを持たずに死んだなら本物であるが、そうでなかったら、偽者であったことを世界中に表明するように、と身近な同志たちに語っていた。そしてデリーが平穏な取り戻したところで、今度はパキスタンへ行く計画を立てながらも、もし、それまで自分が生きていたなら、と付け加えるのであった。